

翻 訳

日清戦争と中国近代海軍

原書：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*,
chap. IX, pp. 167-197, Harvard Univ. Press, 1967.

ジョン・L・ローリンソン
訳：細見和弘

日本人が朝鮮に関心を持ったのは、日清戦争の遙か以前のことである。我々は、そうした関心を16世紀末に半島を侵略した豊臣秀吉まで遡ることができる。1868年の明治維新は日本国内に数多くの緊張状態を引き起こしたが、そのほとんど直後、日本人がまたしても朝鮮に関心を持つようになった。1874年の台湾遠征〔征台の役〕は、幾分かは征韓論の代替策として日本の寡頭政治の支配者によって仕組まれたものであった。1876年に日本は武力を使い、江華条約〔日朝修好条規〕に調印するよう朝鮮を誘導した。条約の中で、朝鮮は独立した実体として記述されている。こうして半島では、朝鮮を属邦とする中国に代わって、日本がみずからの影響力を手に入れようと努める過程が始まった。

1880年代の初め、中国がフランスの安南侵略に次第に心を奪われていくようになると、日本は親日分子が朝鮮で引き起こした騒乱に乗り、朝鮮に軍隊を派遣した。我々は、1884年に李鴻章が彼の艦隊を台湾救援に派遣するのを差し控えたとき、朝鮮問題を無視できないと主張したのを見た。李と伊藤博文の間に結ばれた1885年の天津条約は、実質的に朝鮮を日中両国の保護領とした。この時、日本に対する中国側の譲歩は、中国が弱体であり、フランスとの戦争がまだ決着していないという事実を反映していた。日本はフランスと結託していると李鴻章が陳べたとき、彼は完全に間違っていたわけではなかった。1885年以後、李鴻章は朝鮮における彼の代理人、袁世凱をあてにした。日本側は、親日分子を勢いづかせ、日中両国が、天津条約にしたがい、朝鮮に軍隊を派遣するような状況を創出しようとし続けた。1894年に、親日の朝鮮人が上海で暗殺された。同じ年に朝鮮で、復古的な中国寄りの勢力である、いわゆる東学党に導かれて、一つの叛乱が突発した〔甲午農民戦争〕。日本は、中国を誘導して朝鮮に軍隊を派遣させるため、実際に東学党を幫助した。かくて、対決の舞台が設けられた。李鴻章は武力衝突に入ることを極度に嫌がったとはいえ、戦闘が仕立て上げられる素材が存在したのである。¹⁾

戦争は、中国の敗戦に終わった——そして、朝鮮と台湾を喪失し、巨額の賠償金も課された。「ちびっこ」の日本が勝者であったから、敗戦は李鴻章の影響力を終わらせた。持続不能な帝国の威信に対する一撃であった。日本は、20世紀の歴史上画期的な重大事件の結果、いっそう大陸侵略へと促された。中国の敗北は、歴史上最も重要な出来事の一つである。けれども、もし中国が海で日本を破ったのであれば、日本の脅威は完全に挫折させられたであろう。本章は、日清戦争（1894-95）の海軍に関する側面について検討する。

もし中国の艦隊と日本の艦隊を比較するならば、中国は海で首尾よく戦争に勝利したかもしれないと結論を下すかもしれない。1894年に、日本の艦隊は総計32隻の軍艦と23隻の魚雷艇を擁し、1万3,928名を乗り込ませた。その艦船の幾つかは、時代遅れであった。しかし、比較的優良なもののうち、10隻はイギリスの造船所で建造され、2隻はフランスで建造された。4,277トンの「松島」は、1890年にフランスで建造され、4,150トンの「吉野」は、1893年にアームストロングにより進水された。「吉野」は、試運転では23ノット〔約42.6km/h〕を出した。(李鴻章が購入したかも知れない)この軍艦は、世界で最速の船として知られていた。日本製の鋼鉄艦「橋立」は、1891年に横須賀で建造され、4,277トン級のフランス最新型と同型であった。日本の造船所は、横須賀の他に佐世保、呉、神戸にもあった。³⁾

日本海軍の訓練は、海軍の成長と足並みを揃えていた。薩摩の海軍人は、1860年代以来海外に渡航していた。そして、アナポリス海軍兵学校では、1870年以来毎年2名の日本人が卒業していた。日本国内では、訓練は、50名以上の英仏両国人の助力を得ると共に、イギリス海軍のアーチボルド・ダグラス (Admiral Archibald Douglas) により長らく指導されていた。⁴⁾

おそらく1890年代の中国海軍と日本海軍の間の最も大きな相違は、日本の艦隊が統一されていたのに対し、中国は依然として北洋艦隊、南洋艦隊、福建艦隊、広東艦隊の四つに分割されていたという事実にあるだろう。1894年に、これら4艦隊は、約43隻の魚雷艇と共に、およそ65隻の大型艦を擁していた。⁵⁾最強の艦隊は、李鴻章の北洋艦隊であった。この艦隊は、単独で日本の艦隊にほぼ匹敵していた。広東艦隊が、最も弱体であった。

従って、日清戦争に巻き込まれた最も主要な地方官僚は、長らく中国の外交関係を支配してきた李鴻章であった。海軍衙門は、従属的な役割を演じたに過ぎなかった。戦時中李鴻章に送られた一諭令は、海軍の総監督として彼に宛てられた。李はしばしば海軍衙門を通して諭令を受け取った。しかし宮廷は、戦時中に指令を発する際に、李だけを伝達者として利用したのではなかった。李以外にも、李と同等か或いは李より地位が低い者が直接の指令を受け、彼ら自身の報告書を提出したのである。⁶⁾京師では、幾つかの機関から成る軍機処が、最も政策の展開に巻き込まれた。⁷⁾

中国の諸艦隊が協調することもあった。1894年7月18日に、台湾巡撫の邵友濂⁸⁾は、軍機処に2隻の南洋艦隊の艦船を要求し、獲得した。しかし李鴻章は、邵を助けようとしなかった。李はその時、南洋が李自身を助けることを望んだ。それは偶然の成り行きであり、主に広東艦隊からであったとはいえ、李は幾つか〔の艦船〕を得た。「広丙」⁹⁾、「広甲」¹⁰⁾、「広乙」¹¹⁾は、1894年夏季の南北合同海軍演習に参加し、戦闘を避けることができないほど長期間留まっていた。そのうえ、南洋艦隊の艦船である「操江」¹²⁾は、重大な時期に戦争とは無関係の任務で北方にやって来て、戦争に遭遇させられた。鋼鉄製魚雷巡洋艦である1,000トンの「広丙」が、1891年頃には福州船政局で建造されていたのに、嫌々やってきたこれらの助っ人たちは、ほとんど成果を上げなかったのである。⁹⁾

それでも、それらの海域で、李鴻章自身の艦隊は、数の上ではイギリス艦隊すら凌駕していた。そして西洋人の大方の意見は、日本より李鴻章を最良目で見ているのである。¹⁰⁾日本人自身は、自信を持っていなかった。対外政策をめぐる、1890年代には、新設された帝国議会で多大の苦しみを経験した。そして多くの日本人は、彼らが中国に勝利したことに驚いた。

1894年7月、日中両国は、朝鮮に軍隊を集めた。しかしながら、日本は東学党を鎮圧した後、撤退しようせず、朝鮮政府の再編成に中国人が協力するよう要求した。中国は、同意するつもりはなかった。李鴻章は、戦争を招く危険性があるため軍隊を増派することを望まなかった。他方、もし彼がより多くの兵士を派遣しなければ、和議に際して西洋人の調停に頼らなければならなかったであろう。そして、これは確かにどちらでもなかった。李鴻章は、丁汝昌提督に対し、朝鮮の陸上で兵士が偶発事件に巻き込まれないよう指示した。7月1日に李は、彼の艦船すら朝鮮海域から撤退させたのである。¹¹⁾このことは、何も解決しなかった。

李鴻章は不本意ながら、朝鮮に軍隊を増派することを決定した。7月16日に、8,000の中国軍が、賃貸された11隻の汽船に護送されて上陸した。後に李は、海軍の護衛の下、3隻の船——そのうちの1隻が「高陞」である——でより多くの軍隊を派遣した。7月23日に、日本は朝鮮国王〔高宗〕を捕らえた。そして27日に、中国に宣戦布告した男〔大院君〕を摂政に任命した。

しかしながら、その時まで、中国と日本は、最初の海戦を交えた。この海戦は、7月25日に起こった。そして、日本が勝利を得た。漢江の河口の沖に位置する豊島の付近で戦われた、この遭遇戦に関する詳細と結末は、教訓に満ちている。

李鴻章が更に3隻の軍隊輸送船を朝鮮に派遣しつつあると日本が知ったとき（そして、前章で言及したように、天津にある李鴻章の施設で活動するスパイがそのことを日本側に話したと陳べた）、¹²⁾彼らは、その護送を遮るため海軍分遣艦隊を派遣した。「秋津洲」^{あきつしま}、「吉野」^{きちの}、「浪速」から成る、いわゆる遊撃艦隊である。護送を担当する中国艦船は、「威遠」^{さいえん}、「広乙」^{くわいおつ}、「操江」であった。最初の3隻の中国戦艦と軍隊輸送船のうち2隻は、7月23日に牙山^{アサン}に到着し、24日に軍隊は陸に降ろされた。「高陞」は、上海で建造された小型艦の「操江」（1869年製）に護衛されていたのであるが、まだ〔輸送の〕途中であった。

7月24日の午後、護衛の司令官である「濟遠」^{ほうはくけん}の方伯謙は、「威遠」を中国に戻した。方は、そのしばらく後で、中国に戻るためか、或いは「高陞」の到着を確実にするために、「濟遠」と「広乙」に乗り込んだ。7月25日の早朝に、「濟遠」と「広乙」は、豊島の近くで「吉野」^{きちの}、「浪速」^{なげ}、「秋津洲」^{あきつしま}に偶然出くわした。¹³⁾

2隻の中国軍艦は、日本敵艦の相手にならなかった。排水量600トンの「広乙」は、恐れるに足りなかった。それに、主要な砲郭に2門の8インチ口径クルップ砲を備えた「濟遠」は、排水量2,355トンのドイツ製非装甲巡洋艦であったとはいえ、「濟遠」を見つけた3隻の日本軍艦の何れにも格段に見劣りした。丁提督は早くから、海軍大隊を派遣するよう要求したが、¹⁴⁾劉歩蟾^{りゅうほせん}は、提督の電信をあたかも交戦に向けた要求のように創作した。そして李鴻章は、その防衛軍をできる限り目立たないようにしていた。

「濟遠」は続いて起こった戦いで敗走し、「広乙」は座礁して焼けた。「濟遠」は、軍隊を乗せて帰航中の「高陞」から見えた。「高陞」の報告に拠れば、「濟遠」は、白旗と日本の旗を掲げ、敏捷な「吉野」に激しく追跡されながら、旅順港に向けて疾走していた。「高陞」自身は、しばらくして撃沈させられた（軍隊が叛乱を起こし、船を見棄てた後のことである）。そして、「高陞」を護衛していた「操江」が、捕獲された。「高陞」の大失敗で約1,000名の軍勢を喪失したことは、¹⁵⁾主要な陸戦での喪失に等しかった。それに、増援する予定であった葉志超提督は、牙山から引き揚げなければならなかった。「濟遠」は、修繕のために旅順港によたよたと入港した。以上のエ

ピソードは、激しい論争を巻き起こし、将来についての懐疑をもたらした。¹⁶⁾

豊島沖での敗戦を受けて、丁汝昌提督と李鴻章は戦略を立て、威海衛と鴨緑江の河口との間の中国沿岸部を防御することにした。海軍の巡航は、これら二つの地点の間に描かれたラインの中に制限されることになった。この戦略は、牙山区域で追い詰められた葉提督を見棄てることであり、西側だけでなく東側からも、日本軍の上陸のために開かれた朝鮮の沿岸から離れることを意味した。丁と李は、艦船の追加購入についても話したが、それでもなお北洋艦隊の使用に戦略上の制約を加えた。16世紀朝鮮の將軍李舜臣は、侵略する秀吉の海路を切断した。李舜臣なら、このような戦略上の制限を、みずから受け容れなかったであろう。¹⁷⁾

これらの限度の中で、丁汝昌提督は7月末と8月初めに少なくとも三度、威海衛或いは旅順港から打って出た。中国は1894年8月1日に日本に宣戦を布告した。軍艦「鎮遠」に仕え、交戦を期待していたマクギフンは「土壇場で」丁の仁川行きを禁じる「総理衙門からの直接の電信」が来ると理解していたのに、丁が気が付いて「犬どもを沈める」ことを望んだ。かくして「ライン」は、マクギフンに知られたのである。彼は、「鎮遠」は愉快的な船であり、戦闘するためにきちんと清掃されており、情け容赦なく攻撃することが期待でき、何者にも与えることを提案しないと言った。¹⁸⁾

8月2日に、軍機処は、葉提督を救援するよう丁汝昌に命じた（もしマクギフンの話が正しいのであれば、このことは、北京或いはそれ以外の場所ではなく、威海衛＝鴨緑江のラインを描いたのは、李鴻章であること、すなわち北京では大きな意見の食い違いが存在していたことを示唆している）。翌日に北京は、丁がどこに隠れているのかを知りたがった。提督については、ずっと苦情があった。交代する必要があると言われた。¹⁹⁾ 李鴻章は即座に答え、葉提督の救援に行かないことに賛成する主張を行った。広々とした海上にいれば、中国の重量艦は、発射する速度にまさる日本を破る機会を与えられるのに対し、朝鮮の沿岸に接近することは（李鴻章は彼の議論を丁汝昌提督から得ていた）、中国の艦船を水雷や他の危険物のある場所に身を晒すであろう。彼は、北洋艦隊で頼りになるのは、たったの7隻であると陳べた。「定遠」、「鎮遠」、「来遠」、「致遠」、「濟遠」、それに〔中国語の〕発音が同じ「靖遠」と「経遠」の2隻である。丁汝昌提督は「北洋への入り口を見張る」だろうし、葉については、何事かが為されるであろう。²⁰⁾

しかし、李鴻章はスパイを通じ、敵艦が葉提督を困らせようと鴨緑江に向かう途中であると聞いたとき、いかなる行動も良しとしなかった。光緒皇帝が全ての中国艦船にその地に行くよう命じたとき、李は自分が既にそうした指令を発したと返答した。²¹⁾ 皇帝は、丁汝昌が敵との接触を避けているとの風聞に立ち戻り、彼すなわち李が、究極は責任を負わねばならないと李に警告した。²²⁾ 李は、牙山区域では砲撃に関する不確かな報告があると反駁し、そこでの〔敵との〕接触を仄めかした。彼は、中国が所有する艦船は少なすぎ、それに加え、李鴻章の兵士が西洋式の訓練をしているので、戦闘の最中に彼らの提督の交替を検討するのは賢明ではないと主張することで、丁と彼自身への厳しい批判を巧みにかわした。もし丁が交替させられねばならないのなら、李鴻章自身がその交替を求めなければならないのである。²³⁾

丁汝昌を中傷する者は、数人いた。以前彼は、威海衛要塞の司令官である戴宗騫と論争していた。威海衛要塞は敵の手に陥るのが不可避になる前に破壊することを、丁は望んだ。そして戴は、李鴻章に向かって丁を中傷し、北京でも中傷していた。²⁴⁾ 李自身も、無傷ではなかった。8月7日

に宮廷から李に電信が送られてきたが、その電信は、彼は長らく海軍を任されてきて、朝鮮で日本の脅威に対抗するまでは上手くいっていたのに、今では言い訳ばかりしていると注意を喚起した。もし海軍がより多くの艦船を必要とするのなら、李に特定させ、全ての将校は協力するよう命じられた。²⁵⁾

8月10日、この論争が継続している間に、日本の艦船は、丁汝昌が不在の威海衛を砲撃した。20隻の敵艦が約100発を放ち、そして立ち去った。防御に当たった者は、大砲のなかに作動しないものがあることを知った。しかし間もなく、ちょうど取り付けられたばかりの江南製造局製4インチ速射砲が命中した。攻撃側の1隻は、牽引されて退いた。しかし日本の艦船は、同じ日に旅順港を砲撃したのである。²⁶⁾

威海衛の急襲に対する李鴻章の反応は、発作的であった。丁汝昌提督は、表向きは天候が魚雷艇にとって危険であるとの理由で、偵察から呼び戻された。防御線は、西に向けて、威海衛とそのほとんど真北にある大連湾の間のラインに引き戻された。²⁷⁾ 大体この時にも、李は、日本がイギリスから砲艦を購入することを耳にした。李が日本から賄賂を取って、朝鮮のシー・レーンから離れて、北洋艦隊を前進させなかったという噂があった。²⁸⁾ 多分これは、噂の域を出なかった。しかし、李が主に案じていたのは、彼の損失を切り捨て、彼の艦船を残しておくことであったと思われる。

宮廷も、8月10日の急襲に吃驚した。^{きつきょう}そして、8月12日の勅令で、丁汝昌が威海衛と大沽を防御するよう命じた。宮廷は、丁の居場所を知りたがった。²⁹⁾ その暫く後でハートは、日本は旅順港に上陸するかも知れないと軍機処に助言した。その憐れな提督には、次の数日間に少なくとも3件の弾劾がもたらされた。³⁰⁾

8月22日に、李鴻章は、丁汝昌が旅順港から威海衛に向かう途中であると報告した。次は何処が攻撃されるのか誰も分からなかった。宮廷は、恐ろしい罰則で脅して、最大限油断無きよう丁に命じた。しかし丁は、名誉を回復する機会をほとんど持たなかった。8月25日に、軍機処は、彼を臆病者であるとして交替させようとした。そして李は、適当な交替要員のリストを提出するよう指示された。次の日、李は、丁の数多くの過失を免責するために、彼を留任としたのに、丁を罷免するよう命じられた。³¹⁾ その翌日、丁は、葉提督を見棄てた廉と臆病さを咎められて、解任された。李は、この時は弁解せよとは言われなかった。³²⁾

李鴻章はそれでも、〔宮廷の決定を〕是認せざるを得なかった。8月29日に、彼は軍機処に電信を送り、彼の海軍購買計画の残念な歴史を概観している。李は、彼の艦隊が旧式であると陳べた。そのうえ、丁汝昌はただ一人の経験豊かな男である。劉步蟾と林泰曾だけが、丁に替わり得る人材であるが、二人とも戦闘の経験が充分ではない。——それに、もし誰かを他省から呼んでくれば、トラブルになるだろう。³³⁾ 実際に、当時北京では劉と林も、臆病者であるとして非難されていた。そうした覚束ない事情のため、李は丁汝昌を守る手助けをしたのかも知れない。³⁴⁾ 提督は結局、警告だけで済み、判断は保留になった。³⁵⁾ しかし、これらの出来事が、絶頂となる数週間後の黄海海戦に入った際に、彼の士気にどれほどの影響を与えただろう——或いは、この諍いが、李鴻章の戦略思考をどれほど蝕んだことだろう。

その間中、艦船を更に購入する話があった。そして、多分要所には、更に2門のグルズン製1.97インチ速射砲が「済遠」に搭載され、他の大砲も約20門が他の軍艦に配置されていた。³⁶⁾ しか

し日本は、朝鮮半島での陸上軍事作戦の勢いを緩めなかった。そして、9月の平壤の戦いは、朝鮮の海域に日本軍による海上軍事輸送の集中を招いた。李は、丁汝昌の警護の下で、鴨緑江へ大型護衛船を派遣することを決定した。9月14日に、4,000の兵士を乗せ、5隻の汽船が大沽を出発した。主要な北洋艦隊が、大連湾でこれらの船と待ち合わせした。ここは、1894年9月17日に、鴨緑江の河口の沖における大戦により最高潮に達した、船の移動の始まりであった。

黄海海戦で、中国と日本は、それぞれ12隻の艦船を有した。西洋の海軍専門家は、中国は装甲板と一斉射撃の重量に強味があり、一方、日本は、艦船の速度と、持続的に砲撃を応酬する際に放たれる総砲威力の重量において優位であると結論を下した。すなわち日本は、速射砲の点で「圧倒的に優勢」であった。日本は、一斉砲撃を繰り返す際に、中国が可能な金属重量の三倍を放つことができ、中国側がより多く所有する6インチから12インチ口径の大砲を補ったのである。李鴻章の艦隊に配置された速射砲は、備え付けるのに間に合わなかった。³⁷⁾

しかしながら、理論上の最高点であっても、常に戦闘に勝利するとは限らない。リーダーシップ、策略、砲弾の有用性のような他の変数が重要である。第一の点について言えば、北洋艦隊のリーダーシップは、不確実な要因であった。

丁汝昌提督は、海軍の序列の頂点に位置していた。彼を知る者は誰一人として、彼個人の勇敢さを疑わなかった。しかし、この年老いた准軍騎兵隊出身の将校は、海軍が得意ではなかった。戦後、中国官僚の側から、広西巡撫〔順天府府尹の誤り〕の胡燏芬は、海軍は陸軍の下位にあると書き記した。西洋では、提督は専門的に訓練され、そのうえ兵士の間で評判がよかった。³⁸⁾ 丁は、専門的に訓練されていなかったし、受けも良くなかった。³⁹⁾

驚くには値しないが、丁汝昌は、それが見つかる場所を問わず、助言を探し求めた。彼の参謀には、外国人が含まれていた。1894年にコンスタンティン・フォン・ハンネケン (Constantin von Hanneken) は、海軍の総査に任命された。そして彼は、時には提督の顧問と呼ばれ、時には共同提督 (co-admiral) と呼ばれたのであるから、彼の地位は重要であった。⁴⁰⁾ 彼はドイツ軍の出身であり、1880年以来、色々なやり方で李鴻章に仕えてきた。とりわけ、これまで見たように、李鴻章の大型要塞を建設する際に功績があった。フォン・ハンネケンは、悲運の「高陞」からの兵力増強を担当していた。そして、「高陞」の沈没に先立つ一斉蜂起の際に、気高い勇気を見せた。黄海海戦が終わると、フォン・ハンネケン、李鴻章の陸軍に転任するよう命じられた。陸軍は、紛れもなく、彼がより居心地よく感じる場所であった。タイラーは、「一人の提督」として仕える「軍事技師」であることが疑わしい人物であるが、フォン・ハンネケンは、「敗北した場合、即刻首になることから丁提督を救うために」共同提督に任命されたと陳べている。⁴¹⁾ とにかく、フォン・ハンネケン、黄海海戦の間は丁提督の活動的な海軍顧問であった。

タイラー自身は、重要な立場にいた。1891年に、若き英国海軍中尉として、彼は九龍湾で中国海軍の軍艦を初めて見た。後に彼は、李鴻章の軍隊に入り、中国を「それなりの可能性」がある一国と見なした。黄海海戦において、彼は李鼎新と共に旗艦「定遠」の共同司令官 (co-commander) であった。すなわち、劉步蟾艦長に対する一種の共同副艦長 (co-executive officer) であった。タイラーは、自分が現実的な権限を持たず、ただ助言を与えられるだけであることを後悔した。李鼎新はタイラーに親切であり、彼に「副艦長」の部屋を使用させた。しかしタイラ

一は、劉歩蟾との関係に気を取られた。それで、タイラーは「ぶらぶら歩き」、通信システムを徹底検査したり、ふと思いついた同じような物事を綿密に検討していた。黄海海戦後、タイラーは彼自身が「幾分は有能である」と気づいた。というのも、彼は後に、当時タイラーを手助けした李鼎新と共に、「鎮遠」で「上級艦長（Senior Executive Officer）」に任命されたからである。しかし、彼が「かなりの権限」を有したにもかかわらず、このイギリス人艦長は、決して充分には受け容れられなかった。しかし、（共同司令官として）タイラーは、鴨緑江の河口に砲撃を始めた時、丁汝昌及びフォン・ハンネケンと共に「定遠」の艦橋^{かんきょう}に立っていた。彼の提案が重んじられたことが分かるだろう。⁴²⁾

タイラーは、丁汝昌が提案を完全に受け入れることを信じた。タイラーは、もし自分がそう助言していたなら、丁は、日本と断交した後、黄海で戦い続けたであろう、なぜなら「丁は、我々が口にしたことは全て同意した」からであると書いている。⁴³⁾

タイラーが黄海海戦以前の数日について思い出したところに拠ると、軍隊は元気がよかった。きびきびして洗練された海員たちは、大砲を美しく飾り付けた。「布地のトップブーツ、だぶだぶのズボン、それに竜の縞模様と等級に応じたカラーボタンの付いた半ば外国製のコートを着た」船員たちは、それほど楽観的ではなかった。というのも、とりわけ「言い表すことのできないこと、マンダリズムの無気力な態度」が存在したからであると、タイラーは言う。タイラーは、彼らが少なくとも提督を「尊敬し、賞賛している」と信じていた。他方、フィロ・マクギフンは、提督は、「将校から成る派閥の中に存在する不満」に対処しなければならなかったと陳べている。マクギフンは、黄海海戦の際の「定遠」での地位は、「鎮遠」におけるタイラーの地位とよく似ていたのである。⁴⁴⁾その点に関連して、広東人の艦長鄧世昌^{とうせしやう}は、北洋艦隊における福建の影響に不平を鳴らしていた。⁴⁵⁾そのとき、誰が李鴻章の艦長であったのか？〔次に、この点について検討しよう。〕

黄海海戦で李鴻章のために戦った12名の艦長のうち、9名が福州船政学堂の出身であり、この9名のうち7名が第一期卒業生であった。10年以上李と行動を共にしていたが、なかには戦闘の経験がない者（例えば、鄧世昌や林泰曾）がいた。鄧と林は、1884～1885年の台湾救援隊で戦闘経験を得たかもしれない。しかし、李は、他日のために彼ら（及び彼らの軍艦）を温存した。

想定された不満について、一人の米国人目撃者は、福建出身者以外は勇ましく戦ったのに、福建出身の将校は臆病になりがちであると記録している。⁴⁶⁾この所説は、真相とかけ離れている。指揮権を割り当てる際に、さほど偏愛の証拠はないのである。1894年に、天津武備学堂の卒業生たちが艦長たる資格を十分に持つ見込みはなかった。このことは、南洋の優越を説明している。1894年に指揮権を持つ南方人は、彼らの艦長としての経験と年功を大体反映する大きさの軍艦を必要としていた。2隻の軍艦の艦長である劉歩蟾と林泰曾は、黄海海戦の20年前の1874年現在において、既にジゲルにより司令官たる準備ができていと公言されていた。外国で建造された軍艦は、最も高い能力を持つ者の下に置かれていたように思われる。鄧世昌は、1880年に彼の最初の船を岩の上に乗せさせた。この黒い汚点は、この劉歩蟾の同級生が、1894年に李鴻章の最大の外国製巡洋艦の艦長でなかった理由を説明しているかも知れない。——そして、この広東人〔鄧世昌〕が福建の「影響力」について不平を漏らさない理由をも説明しているのかも知れない。⁴⁷⁾

1894年に李鴻章が本当にこれらの者たちの「南方人氣質」を恐れていたかは、疑わしい——た

とえ、李がそれを忘却しておらず、それ故に李「自身の部下」たることに疑う余地のない丁汝昌提督の替わりとして、彼ら南方人のうちの一人を使いたがらなかったとしてもである。ともかく、黄海海戦は、李鴻章の天津将校訓練体制の試験場ではなかった。李の将校間に生じた派閥の影響について明確にすることはできない。実は、外国人の影響は、タイラーのような戦闘上の助言を通じて、はっきりと追跡することができる。

フィロ・マクギフンは、彼自身を「鎮遠」の「司令官」と呼んだ。このアナポリス海軍兵学校出身の軍人は、1882年に米国海軍を一人の「もと見習い将校」として立派に除隊した。彼の海軍兵学校でのキャリアは、馬鹿騒ぎ（例えば、階下へのローリング・キャノンボール）によって広く世に知られていた。清仏戦争期に、彼は李鴻章に志願し、帝国の任務を得た。すなわち彼は、天津及び威海衛で操船と砲術を教えた。ともかく黄海海戦中の彼の姿勢は、後に彼を訪れた一人の友人には怠慢に見えたと仄めかされている。黄海海戦を経験した際の軍装をした高齢のマクギフンは、その時を思い起こそうとしている。鴨緑江の沖でのマクギフンの行動について思い巡らしたその友人は、次のように陳べている。「その後ろには、愛国心はなかった。高邁な動機はなく、防衛に向けた希望はなく、自己犠牲はなく、旗はなかった。中国に対して、彼は軽蔑していただけである。彼は、中国の船員が勇敢で我慢強いことを称賛した。しかし、艦長については公然と批難した。丁汝昌提督が、売国奴として、常に敵から月給すら受け取っていたことを除いてである。⁴⁸⁾」タイラーは、マクギフンについて、「彼は、必ずしも正常ではなかった⁴⁹⁾」と明快に陳べている。いずれにせよ、黄海海戦における李鴻章のリーダーシップは、風変わりな者の寄せ集めにより構成されていたのである。

他の外国人は、より低い地位にいた。以下では、パービス (Purvis)、アルブレヒト (Albrecht)、ヘックマン (Heckman)、ニコルス (Nichols) といった名前や、他の名前を持つ者に出会うであろう。官位の劣った者の中には、先の中国教育使節 (China Educational Mission) に派遣された「少年」も少数いた。「コウノトリ」(「大きなひょうきん者」とあだ名を付けられた司令官付き副官の呉も、タイラーに知られていた。タイラーにとって、甲板とエンジン^{かんぼん}を扱う人員は、准士官と同⁵⁰⁾じくらい優秀であった。

黄海海戦は、これまで徹底的に記述され、分析されてきた。というのも、この初期近代海戦に勝利した時、日本は西洋の海軍専門家に留意を強要したからである。⁵¹⁾ここで我々は、中国が近代海軍を獲得し使用しようとする企てを研究する中で浮かび上がってきた幾つかの問題を議論するという見地から、海戦のほんの一部分を考察する必要がある。

戦いの陣形は、それが司令部の状況を反映し、黄海海戦の結果に大に関わるが故に、注目に値する。丁汝昌が交戦を予期していたがどうかは、はっきりしない。それでも艦船は、戦闘に向けて片付けられた⁵²⁾。ボート、手すり、及びその他同類のものは、取り除かれた。クルップ製12インチ砲からは、大型の鋼鉄製防楯^{ぼうじゅん}すら取り払われた。豊島の戦闘では、それらは快速のトラップ馬車であるかのように見えたからである。石炭の入った袋が、大砲の周囲に積み重ねられた。(少なくとも旗艦では) 甲板に〔滑り止めのため〕砂がまかれ、火を防ぐために多量の水が注がれた。兵士は、充電電池 (power charges) を手渡すために散らばった。マクギフンは、以上のように報告している。しかし、後述するように、艦隊の隅々において、無秩序が火災の原因となる危険性はなかった。可燃性物資による火災の方がよほど危険であった。⁵³⁾

9月17日の午後に知らせが伝えられた時には、煙が認められていた。そのとき艦隊は、鴨緑江の入江に停泊していた。タイラーは、鳥の丸焼きのディナーをとるためちょうど席に着いたばかりであった。時間を取って食事を終え、それから丁汝昌とフォン・ハンネケンと打ち合わせをした。蒸気が上り、お付きの副官は旗を持ちながら忙しくしていた。タイラーには、大砲、弾薬、砲弾を確認する時間があったし、船員たちの様子を観察する時間があった。彼らは、「砲弾の不足という退引きならない事実」があるにもかかわらず、元気がよかった。タイラーは、劉歩蟾艦長が司令塔の中に「縮まっている」のは、弾薬不足と関連しているのではないかと疑っていた。ここには、十分な成算があった。陸軍は、朝鮮で失敗した。そして、タイラーは、「いまや海軍に中国の運命が掛かっているだけである。我々は海軍を知るのみだが、海軍はより頼りにされている。大戦に導く一連の世界的事件の新時代」を海軍は知っている⁵⁴⁾と陳べた。

戦いの陣形については、縦列とするか横列とするかの選択があり（すなわち、リーダーについて行くか、並んでゆくかである）、意見の相違が生じる余地があった。ラングは、左右二つの階段形の編成に分ける横列陣形に賛成の議論をした。横列は、まだ重んじられていた衝角戦法も好んだ⁵⁵⁾。さらに、軍艦「鎮遠」と「定遠」の側面には、互い違いに露砲塔が据え付けられ、そこに各二対のクルップ製12インチ後装砲が備え付けられており、そうしたデザインが横列には好ましいと主張した。そのクルップ砲は、正面から外れた方向にのみ（only right off the beam）一斉砲撃が可能であった。しかし、むしろ前方か後方に発砲する時により広範に使えたのである⁵⁶⁾。本当は、西洋で速射兵器の使用が増えたために（より軽量の武器が、船の側面に最もよく配置された）、「鎮＝定」のデザインは、既に時代遅れになり、縦列が好まれるようになっていた。しかし、中国の艦船は、準備が出来ていなかった⁵⁷⁾。他方、横列については、難点が存在した。横列で対抗する艦隊が互いに真正面から接近するとき、射程距離は急速に変化する。そのうえ、もし船が敵の前方にいれば、そのように船は攻撃目標が長々と差し出されているのであるから、敵は前方の船に砲弾を的中させる好機である。砲撃の射程距離は、側面から目標に向けるよりも照準を合わせるのが難しいので、これは有利である。横列は、回転の外側で、船に不可能な速度での回転行動も要求する。もちろん、横列に並んだ各船が整列して90度の回転をすれば、全船は縦隊列に並ぶのである。しかし、そのような機動作戦は、協調性の良さが要求される。

既にフォン・ハンネケンは、現行の旗信号は、北洋艦隊では速度と旋回半径が食い違うため、李鴻章の必要に適合していないと結論を下していた⁵⁸⁾。しかし基礎的な変革を行う時間はなかったし、また日本との戦争の前夜には、——もちろん、丁提督を通じて——外国人が「致命的な通常指令」、或いは「この上なく粗雑な指令」と称した一連の出来事が発生していた。それらは、すなわち、交戦の際に、姉妹艦、或いは他の一組にされた軍艦は、行動を共にし続けるべきであること。全ての軍艦は、もし可能なら、先端を突き合わせて戦うべきであること。そして、もし可能なら、全ての軍艦は、旗艦の目に見える動きに従うべきであること。以上のような指令である⁵⁹⁾。明らかに、この指令は、横列を選択している。しかし、艦隊のためというよりは、むしろチームのために。

しかしながら、タイラーは、鴨緑江の沖で日本の艦船に出会う前の土壇場で開いた審議で、分隊は縦列に決めたことを報告している。すなわち、複数の組から成る隊列であり、各組は後ろに向かって並び、一組の端は〔他の〕隊列の前方にある。しかし、艦船が不揃いに進み始めた時、

タイラーは横列にするよう指示する信号を見た。これは、劉歩蟾による見事な措置であるとタイラーは言う。というのも、その変化により、彼の2隻の軍艦を見たところ保護するように真ん中に導いて、劉の命を守ったからである。⁶⁰⁾ 丁汝昌提督とフォン・ハンネケンは、その変化を見抜けなかった。それでタイラーは、緊急に彼らにそのことを知らせた。にもかかわらず、再び縦列陣形を試みれば大混乱が起こるので、タイラーは、劉の変化を続けることを勧めた。この混乱の全てに速度差が加わって、中国の艦船は三日月状に曲がったが、軍艦はほぼ横隊になり、約6ノット〔約11.1km/h〕で南西の方に向かって移動した。⁶¹⁾

日本艦隊は、横列をとり、約10ノット〔約18.5km/h〕で向かい側からやって来た。横列は、彼らの速射舷側砲に好都合であり、そして日本艦隊の攻撃を特徴付ける窮屈な機動作戦と旋回を容易にした。⁶²⁾ 日本艦隊は、丁汝昌提督の右端に攻撃を加えようと迂回し始めた。このことは、中国に、「日本のTと交差する」べく、隊列が右に45度の方向転換を行う好機を与えた。それは、縦列をとる中国の艦船が、敵の縦列の頭部を横切って北西の方向を通過し、中国の各艦船が、日本の隊列全体に連続して片舷から一斉に掃射することを可能にした。「巨大な黄色旗」が掲げられた。しかし、旗艦の劉歩蟾艦長は、彼自身の側面を危険に晒すことになる45度の方向転換を行う機動作戦を促さなかった。そして、丁汝昌とフォン・ハンネケンには、その好機が見えなかった。それでタイラーは、提案を行い、是認された。信号は発せられたが、他艦はグズグズして旗艦が為そうとすることを見ていた。劉歩蟾は、何もしなかった。そのうえ、タイラーは鼓舞した。劉は、右舷を切るよう命じた。しかし、直後に低い声で取り消した。射程距離がまだ開きすぎているとはいえ、タイラーが劉の不服従を丁に報告できる前に（タイラーはそう言っている）、劉は砲撃するよう命じた。この指令は、午後12時50分に到達した。軍艦に搭載された4門の12インチ砲からの大掛かりな一斉射撃が、恐るべき震動を引き起こした。丁とタイラーがその上に立っていた間に合わせの最上艦橋を粉碎したのである。丁は足に重傷を負った。彼は勇敢に反対したにもかかわらず、彼の船室に移動されねばならなかった。タイラーは、30フィート〔9.1m〕投げ出された。そして一時目が見えなくなった。大きな好機が失われた。タイラーは、はっきりとこの失敗の責任を劉歩蟾の臆病さに帰している。⁶³⁾

たとえタイラーが正しかったとしても、ここでは、儒教的価値と近代海軍の訓練に関する価値との衝突が臆病な指導者を生むため、中国はこの戦いで最初から手痛い悪条件を与えられていたと主張することはできない。臆病風は、黄海海戦で中国海軍兵士の間に随分存在したヒロイズムと同様に、万国共通である。しかしながら、我々は、劉の臆病風と言われているのは、大いに誇張されたものであるとすることができる。海軍の指揮系統の中で、提督が（若干名の助手と共に）無能であり、専門職たる提督に期待される権威を以てして、劉の臆病風を相殺できなかったからである。丁汝昌提督は、政治的な理由で李鴻章に選ばれた。そして、北洋艦隊全体のリーダーシップは、それ故に弱まったのである。10年近く「鎮遠」と「定遠」の艦上で戦闘を仮定した訓練を重ねた後に、大型12インチ砲を放つことが最上艦橋を吹き飛ばすことが知られていなかったのであろうか。多分それは知られていたのである。

別の20分間、日本艦隊は発砲を控えた。伊東提督は、側面を攻撃するためにとった針路を続けた。しかし、おそらく中国艦隊が横隊になって回ることを期待したために、両艦隊の前面に平行線が生み出されるに充分なだけ針路を変更した。この平行する陣形は、出現しなかった。その時、

「吉野」の坪井の指揮下にある日本艦隊遊撃部隊は、14ノット〔25.9km/h〕に減速し、丁の右翼の末端に取り残されている物の周囲を動き回った。別の10分間は、中国旗艦の見張り人が射撃されてしまったため、リーダーシップの物的手段すら失われた。⁶⁴⁾ その結果として生じた陣形は、高い絶壁から北方に向けて戦いを観察した外国人目撃者により、次のように報告されている。

この時は、午後2時半であった。そして戦いは、3時間近く進行していた〔原註：これは時間が長過ぎるように思われる〕。事の始まりを見ていないので、我々はしばらく何が何だか分からなかった。船は混同して、散り散りバラバラであった。……乱闘は、海岸に近づいていた。……多くは、2マイル〔3.2km〕内に上手くおさまっていた。……このために、もちろん我々は船をよく見分けられなくなった。そして、我々は、中国人が戦いに負けているという明白な気配を感じ始めた。協力して働き一緒に居続ける日本の諸船は、我々が気付き始めたように、絶え間なく激しい攻撃を浴びせ、砲火と作戦行動の敏捷さにおいて優る敵の四方をぐるりと航海しているように思われた。中国艦船の幾つかは、手も足も出ない様子を見せているように私には思われた。敵軍の中で見られるような、団結せよとの指示はなかった。⁶⁵⁾

日本艦隊は、遊撃部隊と主力部隊に分けた。初めは、丁の右端を回っていた。右端には、2隻の旧式イギリス巡洋艦の「超勇」と「揚威」がいた。両艦は、船首から船尾へ縦に重砲を備えており、将校の国への航路に連結していた。この神聖な場所は、上品に上辺を取り繕った鏡板^{かがみいた}によって名高く、戦いでは剥ぎ取られなかった。日本軍による攻撃は、これらの路地を騒々しい激情の分遣隊に変え、大砲を断ち切らせた。艦長は立派に戦ったが、どうしようもなかった。それぞれの艦長は、福州船政学堂の出身者である黄建勳^{こうけんくん}と林履中^{りんりちゅう}であった。二人とも溺死した。陸上で観察していた者は、「超勇は、全くの残骸であり、陸まで力なく吹き流された。我々が立っていた場所から半リーグ〔2.4km〕である。……船の上部の建物は、ぶつかってバラバラになった。切断された身体が撒き散らされた、船の甲板、大量の船の残骸と死骸……続いて、揚武が陸に打ち上げられ、同様に何度もたたきつけられてバラバラになり、燃えていた。船は、遠く陸を離れた。⁶⁶⁾」と言っている。

マクギファンに抱れば、この同じ戦いの最初の半時間に、「済遠」に乗っていた方伯謙艦長が逃げ出し、広東艦隊の「広甲」に乗っていた福州船政学堂の出身でない呉敬榮艦長^{ごけいらい}が同じく逃走するのを見た。一番端の左翼から離脱した、これら二艦は、その先を走る艦隊全体の後ろを通過した。「広甲」は大連湾で座礁し、後になって日本軍により破壊された。「済遠」は、北洋艦隊の廃品となった残りに先立つ7時間前に、旅順港——「済遠」が走行中に困窮した「揚威」に衝突したと言う人がいる——に入った。そして、方艦長は、彼の個人的な勇敢さに関する論争を始め⁶⁷⁾た。論争は、彼の即決の死刑執行後も長らく続いた。

次に日本遊撃部隊は、更に2隻の中国艦船が数隻の魚雷艇を伴い北に向かっていることに気付いた。「平遠」と「広丙」は、遅れて出発していた。そして、「平遠」と「広丙」は戦いに全く参加していなかったが、「吉野」が両艦を圧倒した時に逃れ去ったと言う者がいる。⁶⁸⁾ 他にも、両艦は、困窮した日本が商船を軍船に転用した「西京」を攻撃し、「松島」に砲弾を発射したとすら

言う者がいる。もしそうなら、速度が遅く弱体の「西京」を沈めるのに失敗したのはおかしい。「西京」は、制御不能のため、もう少しで「浪速」に衝突するところであったのである。ともかく、これら2隻の中国艦船も、いくらか接触した後に、失われたのである。⁶⁹⁾敗北と離脱により、中国艦隊は半分に切断された。そして、そのうえ更に多くの艦船が失われた。

福州船政学堂で訓練を受けた鄧世昌艦長が、たとえ彼の「見事なエルスウィックの巡洋艦」を「称賛に値する冷静さ」で指揮し、「彼自身の船が外皮を取られ、……そして、右舷に船が傾いた」後で、「吉野」を衝角で突こうとしたことが陸上から観察されたとはいえ、次は、鄧の下にある「致远」の番であった。明らかに鄧は、「定遠」を狙う「吉野」の魚雷を遮断したのである。蒸気ポンプが懸命に稼働し、船が沈没するまで大砲は放たれていたが、支援はなく、「致远」は3時30分頃、250名の乗組員もろとも沈んだ。それと同時に、「日本の船から歓喜の音があがる……」のが聞こえた。⁷⁰⁾鄧艦長は、彼の下僕から申し出があった助命の電話を断った。そして、彼を救出しようとした彼の愛犬による試みさえ避けようと努めた。⁷¹⁾

林翼升艦長（明らかに福州船政学堂の出身ではない）の指揮下にある「経遠」は、およそ半時間後、全員一緒に沈められた。しかし、「高千穂」^{たかちほ}、「秋津洲」、そして「吉野」が「経遠」を沈める仕事を実行するのに1時間を要した。この「経遠」の沈没については、後に問題を残した。なかには火災による損傷を適切に制御したことが、「経遠」を救ったと言う者がいた。「経遠は日本海軍によって沈められたのではないが、単に燃え尽きることを許されただけであった。敵艦からの砲弾が船の木工部に一撃を食らわし、船に火を点けた。それはほんの小さな事であり、バケツ二三杯の水でたやすく消火され得たはずであった。ところが、艦内では消防隊が組織されていなかった。そして皆は、火が船全体に広がるまで、出来る限り遠くに逃げ去ったのである。⁷²⁾」

明らかに、訓練は——おそらくラングが離任して以来——ずっとだらけていた。旗艦の上では、組織的に足りないものも存在した。日本海軍は、軍艦の「定遠」と「鎮遠」に最も関心を持っていた。しかし、その大型大砲と重い装甲により抑え込まれた。「定遠」の操船は、福州船政学堂出身の李鼎新と劉歩蟾により分担された。彼らは、巧みに操縦した。フォン・ハンネケン、タイラー、ニコルス、それにアルブレヒトも、効率よく働いた。「定遠」は、伊東の旗艦である「松島」を「恐ろしい」交換に引き込んだ。そして、「定遠」の10インチ砲弾の一つが、敵艦に炸裂した。そして、弾薬を取り付けて発砲して、公然と80人に傷を負わせていた。伊東は撤退し、旗を変えなければならなかった。しかし、「定遠」も——「鎮遠」に掩護されていた——誤爆に対処するため退却しなければならなかった。幾つかの小型ギアが、船首部の倉庫の中でずっと燃えていた。「全てがひっくり返っていたため、誰もその船の消火に当たろうとは考えなかった。しかしながら、アルブレヒトは、ほとんど個人の実例として、ポンプを 작동させ、弾丸と砲弾の中でそこに立ち、部屋がほとんど洪水状態になるまで水を注いだ。」と言われる。そうでなければ、船は「失われるか、あるいはひどく無能になった」であろう。⁷³⁾

その2隻の軍艦は、互いに接近して働いた。実際に、一度その間に挟まった日本の2隻の船は脱出した。それは、同士討ちを避けるため、「定遠」と「鎮遠」が砲撃を止めなければならなかったからである。「鎮遠」は、福州出身の林泰曾艦長と福州出身でない高級将校(?)の楊用霖^{ようようりん}の下にあって、立派に戦った。そして、「鎮遠」の外国人砲兵隊員であるヘックマン(Heckman)⁷⁴⁾は、「吉野」をかくも激しく損傷させた狙い撃ちへの評価を要求している。⁷⁵⁾甚大な損傷を受けた

「来遠」にも、高邁な勇気があった。黄海海戦では、全部でたった4隻の艦船が留まるか生き残り、4隻が沈められるか破壊され、そして4隻が立ち去った。そのうち1隻は、完全に失われた。

もし砲撃するなら、彼の艦隊はまだ無傷であるのに、伊東は、日没時に攻撃を止めさせた。中国の魚雷艇がやって来た。そして伊東は、中国の魚雷艇による夜襲を恐れた。伊東は、丁提督を孤立させるべく、威海衛に向けて進んだ。しかし、生き残った中国艦船は、旅順港に向かって、別の途を行った。中国海軍がボキンと折れる前兆は、福州船政学堂の出身で、生き残った「靖遠」の葉祖珪艦長⁷⁶⁾によって作られた。外国人達は、旅順港に向かうやつれた古参の軍人たちに仰天させられた。「来遠は、艦隊でどの船よりも、火災と砲弾により甲板上で損害を与えられていた。そして、ぎょっとするような光景であった。……来遠を見た外国人は、甲板のギアが完全に大破されていたので、船が港に連れて来られたことを驚嘆すべきことだと考えた。しかしながら、本来は、来遠は双方の船体や装備、エンジンが健全なのである。」⁷⁷⁾ 両軍艦とも、主として甲板上に非常に多くの激しい砲弾が命中した。その数は、2隻で約350発に及んだ。⁷⁸⁾

一人の注意深い観察者は、中国が197発の12インチ飛翔体を発砲し、そのうち半分は、炸裂する砲弾と言うよりは、むしろ実体弾 (solid shot) であり、10発が命中したが、6発は実体弾、4発は砲弾であったと記録している。より小型の大砲から、中国は482発を発射し、命中弾は58発で、「比叡」に22発が命中したと記録されている。中国は、5本の魚雷も発射したが、命中しなかった。得点を付けると、試みたうちで約10%の確率であった。日本海軍は、速射砲を使って、約15%の得点を上げた。⁷⁹⁾

中国海軍は、特に大型大砲に用いる弾薬の「ひどい」不足に妨げられた。8門の12インチ砲のそれぞれにたった14発分の「普通の砲弾」をもつのみで、残りは徹甲弾^{てつこうたん}〔装甲を攻撃目標として使用する砲弾〕だけで戦いに入ったと言われた。マクギフンは、「比叡」は対抗するために徹甲弾しか使用できないため、逃走したと信じた。大型大砲のための砲弾の3発分を除いた全てが、行動が終わった時に使われていた。マクギフンには、伊東が仕事を終えることに失敗したのは、「不可解」であった。⁸⁰⁾

炸裂する飛翔体に関しては、火薬がしばしば良質でなかったこと、あるいは砲弾がしばしば適合していなかったことは、本当であった。「鎮遠」から放たれた10.2インチ砲弾が「松島」に命中し、左舷船尾近くの魚雷発射管にいた4名を殺害し、砲座に一撃を喰らわし、貯蔵室やオイル・タンクを駆け巡った。しかし、砲弾が砲座に当たったときに砲弾が砕け、セメントが詰められていることが分かった。2発の「どでかい砲弾」が、「西京丸」を突き通した。⁸¹⁾ 李鴻章の「後路」、あるいは補給施設に関する外国人の批評は、明らかに間違っただけではなかった。

確かに、日本海軍も欠陥のある弾薬を持っていた。「超勇」と「揚威」は完全に沈められなかったのだろうか。日本海軍は、中国軍艦の14インチ装甲帯の5インチ〔12.7cm〕以上を決して貫通することはできなかった。日本海軍の砲弾の中には不発弾もあり、一人の日本人は、当日使用された「銅製の砲弾」の中は役に立たないものがあったと不平を鳴らした。リーダーシップと訓練が全てではなかった。⁸²⁾

他の物資的要因について言えば、——陣形を維持すると仮定すれば——船や装甲の重さよりも、明らかに発射の速度と迅速さが重要であった。一人の西洋人は、もし喫水線に重い装甲板を取り付けば、船は沈没しなくなるが、それでも無用の大砲を載せた浮遊廃船に変わりうるものであれ

ば、装甲は明らかに無益であるとの所感を陳べている。⁸³⁾この種の声明は、西洋海軍専門家ですら、黄海海戦から教訓を得ようとしていることを示している。それでもやはり、中国の北洋艦隊は、日本海軍と比較しても、廃れていた。そしてその人員は、訓練は無しというわけではないにせよ、充分には訓練されていなかったか、日本が中国に対峙するテストを実施するに足る水準に達していなかった。また、艦隊の陸上常設編成かあの適切な支援も不足していた。

日清戦争は、黄海海戦とともに終わったのではない。陸上戦が、継続した。旅順港で（急がずに）修理が行われていた北洋艦隊の残りの艦船は、依然として現役の艦隊であった。李はなお、2隻の戦艦を含めて、7隻の使える艦船を持っていた。これらの艦船はなお、効果的な輸送任務を実行できたか、あるいは日本軍の海上通信を困らせることができた。李鴻章は、三眼花翎と黃馬褂（昔宮廷により贈与された名誉のシンボルで、黄海の敗戦で懲罰として取り去られた）を剥奪されたことを悩んでいたが、皇帝から艦船を修繕し海上に派遣させよと要求されたことで追い立てられた。日本軍が次に何処を攻撃するかについては、数多くの憶測があった。一人の西洋人は、修理が遅れていることについて以下のように論評している。「何よりも一つのこと、旅順における証拠であった。——換言すれば、将校と海員は、海に備えて彼らの艦船を修理することをそれほど案じていないように思われた。戦いが終わって一週間以上、難破船は無為に過ごすことが許された。そして、定遠の帰艦中に、分解された船体は、約2週間後に発見された。そして定遠は、中国海軍の最も優秀な船の一つである。」⁸⁴⁾

宮廷は、昔の方便を試みた。スーパー軍務長官職を引き継ぐために、一人の「新人」が——それは老いた恭親王であった——呼び戻された。⁸⁶⁾タイラーとマクルーアに助力されて、丁提督が居残っていたため、フォン・ハンネケンは、北洋艦隊の指揮権の申し出を丁重に辞退した。新参の専門家であるマクルーアは、航海経験を持っていた。しかし、それは天津近海でのタグボートに限られ、当地で彼は酒飲みという評判であったので、「新しい」高度の指揮権についていっそう訝しんだかも知れない。⁸⁷⁾1894年11月に、新規の首都機関である督辦軍務処が創設され、軍機処にすら取って代わった。⁸⁸⁾これらの変革は遅きに失したし、無益であった。

助けは、南方から要求された。南洋大臣の劉坤一は艦船を派遣するよう命じられたが、彼の5隻無しでは済ませられないと返答した。後になって、劉は軍事上の特命を受けて北にやって来た。その間、南京では、張之洞が後任になった。張も、艦船を北に派遣するよう指示されたのである。⁸⁹⁾1894年末及び1895年の初めに威海衛で海軍が最後の抵抗を行ったとき、南洋艦隊の艦船は2隻参加していた。その船は、黄海海戦で（おそらく慎重に戦場から退去していたから）生き残った「広丙」、そして「広庚」であった。他の艦船は、1895年にやって来た。しかし、これらの艦船は、戦いが終わった後に所属の艦隊に戻ってからは、威海衛の降伏が終了した後に来なければならなかった。というのも、威海衛にある全ての艦船は、日本の所有物に移ったからである。⁹⁰⁾ほんの少しだけ但し書きを付け加えると、北洋艦隊は、日清戦争の開始から終結まで参加した唯一の艦隊であることを繰り返してもよいかもしれない。

10月末に、日本軍は、遼東半島東岸の北部に位置する花園港に上陸した。抵抗する者は、いなかった。李鴻章は、疑うまでもなく、敵が旅順港で陸上から背後攻撃を行う準備を整えていることを知っていた。11月の始めに、日本は見捨てられた大連湾を占領した。フォン・ハンネケンに

より構築された誇り高いコンクリート製砲台の中に水雷及び魚雷による防衛に関する図面が見つかりさえした。⁹¹⁾ その間、中国では官僚が艦船の購買について話し合っていた。⁹²⁾

宮廷は、丁提督をいつでもフラストレーションのはけ口にすることができた。そして、11月3日に、基地に向かって陸路から接近する日本軍に砲撃を浴びせるべく、艦船を旅順港から脱出させるよう李鴻章に命じる一方で、丁は懲罰の対象に選ばれた。李は、14隻の日本の快速船と7隻の魚雷艇に対抗するために、たった6隻の艦船と2隻の魚雷艇を持つのみであると返答した。北洋大型艦の修理は、延期されねばならなかった。李は、旅順港に軍隊を乗せる輸送船を持たなかった。宮廷は容赦なく、マクギフンに指揮権を与え、救援軍の8歩兵部隊を引き入れられるべきであると返答した。李は、彼の戦艦を護衛に使用することに対するフォン・ハンネケンの異論を引用することで受け流した。そして、彼とマクルーアに相談することを約束した。この応答は、紛れもなく、李に対し艦船を旅順港から脱出させるよう命じた11月10日の諭令の妨げになった。もし丁がこの撤退を成し遂げなかったなら（彼の地位は何だった？）、彼はクビにならなければならないのである。⁹³⁾

丁は、旅順港は防衛できないと既に結論を下していた。その理由は、一部分はその要塞の配置のためであり、一部分は、彼が地方官僚たちの協力を得られないからであった。⁹⁴⁾ 11月11日に、日本艦隊は彼を戦いに誘い出そうとしたが、当時はだらしないうちに、数日後彼を逃がしてしまった。丁を威海衛まで彼の艦隊を取りに行かせたとき、日本艦隊は、その艦隊を破壊する任務を延期するのみであった。西洋人の観察者の中には、旅順港への遠征全体で日本が犯した唯一の基本的な誤りであると言う人がいる。⁹⁵⁾ ともかく、旅順港は、猛烈な陸上戦の後に、丁の艦隊が去るとともに、11月21日に陥落した。

大体この時に、丁提督は、強力な支援を受けていた。劉步蟾——彼は丁提督の役目を肩代わりする責任を手に入れたくなかったかもしれない——を含めて、彼の艦長は皆、彼のリーダーシップを支持して、威海衛の陸上で将校たちと合流した。彼らは、初めは丁提督を裏切り者と弾劾すらしていたのである。マクルーアは、丁の解任は、道徳の荒廃をもたらすと口添えした。⁹⁶⁾

艦隊は、事件を起こさずに直隸湾を渡航したが、不運なことに「鎮遠」が威海衛に入ったとき、水中の障害物にぶつかった。この出来事は、艦長の林泰曾が自殺するという恐ろしい結果を伴った。⁹⁷⁾ 11月末には、定遠と鎮遠が、「経遠」、「来遠」、「平遠」、「濟遠」、「威遠」、「広丙」、「広庚」や6隻の阿姆斯特朗製砲艦、11隻の魚雷艇とともに、威海衛に錨を降ろした。日本は、この艦隊の潜在的脅威を無視することはできなかった。⁹⁸⁾

しかし李鴻章は、軍事的敗北と政治的攻撃の下で、伝統的な戦略上の処方にて行っていた。戦争は終わった。新しい艦隊が建設されねばならなかった。そして、ここに核心があった。もし新しい艦隊が建設されねばならないとすれば、威海衛の大規模な要塞とともに、そのまま使用される。タイラーは、簡潔に、「我々は、戦う積もりはない。……我々が港でそれに怯えることになると聞いたとき、私は安堵のため息をついた。」⁹⁹⁾ と言った。なるほど、艦船の中の幾隻は、時折、西方の登州^{とうしゅう}や東方の成山^{せいざん}まで航海したが、敵を待つ固定した要塞や固定した艦船という概念は、引き継がれたのである。¹⁰⁰⁾

にもかかわらず、丁提督に関する論争は継続した。12月16日に、丁を逮捕するよう指令が下った。葉志超にも下った。丁は肩書きを剥奪されることになったが、留任とされた。李鴻章は猶予

を求めたが、間もなく丁に替わり得る提督について考慮に入れ始めた。劉步蟾は、該当しないであろう。提督に昇進する少なくとも10年前には総兵（senior post captain）として仕えるべき人物であると、李は言った。「平遠」の艦長である李和練（福州船政学堂で訓練を受けた）は、凡庸であった。「鎮遠」の楊用霖は有能であったが、林の自殺後に艦長の地位に丁度移ったばかりであり、それほど早く昇進させることはできなかった。損傷した「鎮遠」を検分するために宮廷が派遣した道台（徐建寅は、丁と付き合いがあったにせよ、文官であり、適していなかった。101）（徐建寅は、曾国藩の汽船を建造した徐寿の息子であり、疑いなく船を熟知していた。しかし、あのような情況ですら、徐の名前が提督の交換要員を考慮する際に現れることは、ほとんど理解できない。）李鴻章は、粘り強く丁を擁護した。その理由は、一部分は、彼が近代海軍に必要なものについて幾分かは理解していたからであり、そして一部分は、もちろん李自身の利害に関わるからである。しかしながら、丁提督の公的な赦免はなかった。

威海衛における丁の行動は、反抗的態度と敗北主義的行為が混ざり合っていた。彼は長らく威海衛の要塞を破壊したいと望んでいた。そして、彼の到着後、強弱様々な程度の反対と彼の活動へのサボタージュ——最後は、愛国者によるというよりは、むしろ用心深く無敵の日本軍をそのまま反転させることを選んだ人たちによる——にすら対処しつつ、その願望に固執した。102）他方で、丁は、要塞の一つが敵の手に落ちた後で、その要塞を防ぐために、みずから1隻の船（「経遠」）を始動させた。そして、その船が余りに速く沈められたために、その旗を降ろすことはできなかった。103）

1895年1月末に、輸送された日本軍が難なく威海衛に上陸した。丁の艦船は、日本人に包囲された。彼らは1月20日以来、要塞化された威海衛を、海に向かって注視していたのである。1月25日に、伊藤は、丁に賢明且つ紳士的な降伏を勧める書簡を認める（したた）に足る自信を感じた。書簡は多数の者にとり非常に理性的に聞こえたに相違ないとはいえ、丁がこの書簡を李鴻章に回覧したのは、丁の勇気の限界である。104）山海関における軍事問題を担当する特命欽差大臣劉坤一は、丁の処罰を一時保留し、軍功により自らの罪を贖う責任を負わせるよう求めた。しかし、この提議の結果は、宮廷からは丁の昔の敵を数人罰する命令を引き出したただけであった。105）

丁提督は、気乗りはしないが、彼の艦隊を救う好機が一度あった。ひどい強風と同時に2月が到来し、余りに猛烈なため、〔港の〕封鎖に携わる日本人は風よけを探さなければならなかった。しかし丁は、逃走しなかった。106）日本の上陸軍に未だ占領されていない幾つかの要塞を破壊するために、彼は日本海軍の砲撃の休止時間を使用し、かくして二三日抵抗を長引かせた。2月3日に、日本軍は港の東岸及び南岸に上手く設立された。そして、捕獲した大砲を丁の艦船に向けた。

丁の最大の問題は、日本軍による魚雷艇攻撃の発生が増えつつあったことである。魚雷艇は、防材を切断後、夜間に到来した。2月に、こうした攻撃は、恐ろしく有効であった。2月4日の夜に、「定遠」が穴をあけられた。そして、その防水ドアが使える状態ではなかったために、船は座礁し、要塞は救済を断念させられねばならなかった。107）翌日の夜に、敵の魚雷艇は、「威遠」や「来遠」、そして輸送船「宝筏」を沈めた。これらの艦船は、夜間にまだ明かりを点けていた。裏切り者がモールス信号で攻撃の的を絞らせたという主張があった。信頼できる筋の話では、「威遠」と「来遠」の艦長である林穎啓と邱宝仁（ともに福州船政学堂の出身者）は、攻撃に遭った時間に陸上で色事に耽っていたと言われる。108）丁提督は、彼の方がよく知っているのに、途中で

山東巡撫李秉衡¹⁰⁹からの助力を求める報告を利用して、彼の部下を欺こうとした。情況は、彼の両手から離れていた。

上に見たように、2月7日に、一時的に丁の指揮下にあった「靖遠」が沈んだ。「靖遠」の艦長である葉祖珪（福州）は、特に明記されていない用件があつて陸上にいた。それと同じ日、残りの中国魚雷艇は、日本軍による封鎖を突破しようとした。それらの魚雷艇は、日本軍の砲火の嵐に遭った。そして、猛攻を免れた魚雷艇は、敏捷な「吉野」に捕獲された。それら魚雷艇の船長は、苦しい現実的な選択を迫られた。二三日前に丁は、彼の艦船は一隻も敵の手に落ちてはならないとする宮廷の指令を受け取った。にもかかわらず、自由を求める悲惨な逃走は、このほんの僅かな機会を手にした者たちの斬首を命じた、宮廷のもう一つの指令に直ぐ続いて起こされたのである。これら水雷艇の船長たちの行動は、おそらく指令に対する返答というより、むしろ規律の完全なる崩壊の反映であろう。

丁提督は、降伏に対し、特に劉公島の兵士から喧騒が高まるのに直面した。マクルーアも、密かにそれを促した。丁は、抵抗した。彼は、艦長たちに彼らの艦船を沈めることを望んだ。しかし彼らは、異議を唱えた。敵は、戦いに勝利した後で手に入れたい良質な海軍マテリアルをそのように理不尽に破壊されれば、報復を行うであろう、という実際的な理由のためである。丁もまた、港からの脱出を提案されたことに合意しなかった。2月11日に、兵士たちがナイフを抜いて丁に接近したとき、彼は、詫びを入れ、彼の船室に退き、致死量のアヘン¹¹¹を飲んだ。

丁の死後直ぐに、降伏文書が道台の執務室で書き上げられ、「広丙」の艦長である陳璧光^{ちんへきこう}によって伊東に伝えられた。程は、降伏のメッセージを伝えるために、アームストロング製の砲艦「鎮遠」^{ちんへん}に白旗を掲げて移動した。これは、1895年2月12日であった。戦いに勝利した日本軍は、丁重に将校たちがその地を離れることを許した。しかし、残った全ての艦船は、——丁提督の亡骸を正装安置して運び去る任務に就いた「広庚」を除いて——日本に引き渡されることになった。かくして、「鎮遠」、「広丙」、「濟遠」、「平遠」とアームストロング製の砲艦6隻は、敵の手に渡った。そして、李鴻章の北洋艦隊は、死んだ¹¹²。同時に、劉步蟾、楊用霖^{ちやうぶんせん}、張文宣（劉公島陸軍の司令官）、そして戴宗騫（要塞の司令官）は、丁提督の後を追って自殺した¹¹³。

振り返ってみると、この冷酷で悲しい全職務の中に、ほとんど滑稽な皮肉が存在した。「広庚」が、上述した重大な役目を果たすため、中国人の手に取り残された。「広丙」はさほど好感を持たれておらず、船を広東に戻さなければならないと激しく思った艦長の陳璧光は、伊東に船を確保する許可を求めた。彼は、「広丙」は広東艦隊に属しているが、広東艦隊は戦争には実際に参加していない、と主張した。伊東は、この教訓的な論法に対し返答できなかつた¹¹⁴。

先述した黄海及び威海衛での交戦に関する選り抜きの論評は、中国が近代海軍を獲得し使用する努力を妨げた。調べると興味深いもう一つの領域は、報償と懲罰の領域である。以下で論じる詳細は、ここまで議論した戦闘の結果から取り上げられる。

1894年9月17日の黄海海戦の直後、李鴻章は、報償の推薦をした。生き残った候補者には、劉步蟾、林泰曾、楊用霖、李鼎新、そしてもちろん丁提督が含まれていた。贈位するために引き合いに出された死亡した英雄は、浜に追いやられたか沈められた4船の鄧世昌^{りんよくしやう}、林翼升^{こうけいしん}、黄炯臣、林履中^{しんじゆしやう}であった。7月25日の豊島の戦いで「濟遠」の艦内で殺された沈寿昌^{かけんしやう}や柯建章のような劣

位の者すら含まれていた。おそらく黄海海戦から逃走した方伯謙については、皇帝の裁量で処罰されるよう求めた。黄海の大難の後に旅順港に船を引き返した4名の者は、黙って見逃された。すなわち、「靖遠」の葉祖珪、「来遠」の邱宝仁、「平遠」の李和練、「広丙」の程壁光¹¹⁵⁾である。この全てがはっきりしているわけではない。例えば、「来遠」は、旅順港で報告されたあの「ひどい判断」であった。そして、その艦長は、間違いなく戦闘から立ち去らなかつた。宮廷すら、ともかく報償に一つの見落とし——豊島沖で破壊された「広乙」の林国祥¹¹⁶⁾——があったかどうか疑わしく思い、李鴻章に調査するよう求めた。

懲罰の法典は、十分に明細であった。タイラーは、法典は確かに使いものになると認めた。下士官兵の鞭打ちは、しばしばむき出しの剣でなされた¹¹⁷⁾。それでもやはり、法典が中国海軍将校に機能するということが、何かしら不都合であったように思われる。おそらくそれは、上手く働き過ぎた。それで、黄海海戦で鄧世昌が自殺して以後、李鴻章は、丁提督から海軍将校を訓練するには長い時間がかかるとの申し立てがあったので、自殺による高価な損失を阻止するために法典を立案した¹¹⁸⁾。けれども、しばらく後で旅順港のパニックの中で、李は、京師で臆病者に対し懲罰すること——それはもし一貫して適用されるなら、確かに現存する法典により既に必要とされていた¹¹⁹⁾——を促した。

おそらく面倒なのは、法典が首尾一貫して適用されなかつたことであろう。非常に大きな機会があったので、正当性を得られなかつたのである。もちろん、最終の裁判官は、皇帝であった。刑罰の法典は、通常はそうした最終的な判断に対する訴えを規定する。しかし、この場合は、特別な問題があった。皇帝は、大抵は事実から隔離されていた。翰林院^{かんりんいん}の進歩的一員である文廷式^{ぶんていしき}は、戦争が開始した時、全ての重要な電信が尊厳を有する者の眼に入る前に、宮中の翻訳機関により改竄されることに気が付いた。文が皇帝にそう助言すると、皇帝はかなり怒った。しかし文はその後、慶親王^{けいしんのう}〔奕劻^{えききやう}〕の敵意を招いただけであった¹²⁰⁾。この情況は、不確実性を助長した。

軍法会議の制度は、存在しなかつた。儒教的な見地では、責任あるいは過失の基準は、相も変わらず本質的に道徳であった。道徳的要因は、人間の失敗の実像をなす。しかし、中国海軍将校は、その中の込み入った仕組みで艦船を稼働させた。そして、そうした新しい情況の下では、専門的な判断による、すなわち告発された将校の海軍同僚による徹底的な考察によってのみ決着が付けられる技術的な考慮のために余地が作られてきた。実のところ、道徳上の変動性ですら、皇帝に近い政治的側近により変えられたり、取り決められたのかもしれない。

劉歩蟾の事例には、啓発させられる。李が（これまでの章で見たように）彼の人格について疑義を持ったとはいえ、彼は10年以上の間ずっと李鴻章と近しかった。タイラーの見方では、その男は臆病者であった。これら同じ事件に関する歴史家である張蔭麟^{ちやういんりん}は、場合によっては、確立した判断を逆転させたがり、特に処刑された方伯謙の容疑を晴らそうとするとはいえ、タイラーの話は、張蔭麟により受け容れられた¹²¹⁾。劉は、この今日の著作者が参照してきた、いかなる記事の中でも称賛されていない。ところが、タイラーが見たこと（そして、劉は最初の12インチの一斉砲撃を指令することで、それを隠蔽したとはいえ、きっと他に劉の反抗を観察した者も居たに違いない）にもかかわらず、彼は、黄海海戦後に褒賞されるよう推薦されたのである。そして、やっと結末を迎えるようになって、威海衛で、彼は自分の命を絶った。彼の自殺は、罪を犯した者の行動であったかもしれないし、あるいは戦いに敗れた英雄の最後のジェスチャーであったかもしれない。どち

らであるかは、分からない。

方伯謙は、正反対の事例かも知れない。提督自身に次いで、戦争中に論争的になった人物はいなかった。そして、論争は、黄海海戦後の彼の自殺とともに終わりはしなかった。その記録は、1894年7月の豊島戦役に遡る。豊島戦役については、交戦の時間、開戦の責任、「広乙」の参加などに関する多くの問題があった。方は日本の艦船と対戦するのを期していたと言う者がいる。他の論者はこの説を否定し、方は、追跡する「吉野」に後部備砲（after-battery）を使用する許可を与えるために、彼自身の扇形天幕を撃ち続けなければならなかった——つまり、彼は戦闘準備をしていない——と主張している¹²²⁾。

方の批評家は、彼は二つの戦闘から逃げ去ったと言う。豊島沖で、「済遠」は、乗組員の持つ20挺のボーガンを失った。そして、白旗と日本旗の下に逃げ去った。その間中、方は、彼の船室の中に隠れていた。方の第一、第二将校は発砲する許可を求めたのに、彼らに発砲を命じることを恐れたのである。荒れ狂った船員が、命令を公然と無視し、追っ手に発砲したと強く主張されるのである¹²³⁾。

黄海海戦について言えば、方の退却は非常に軽率であったので、彼が損傷を与えられた「揚威」を激突させた浅瀬に駆け込んだと強く主張される。かくて、「方の航海術と水先案内は、彼の度胸と大体等しい。彼の鳴り物が突然変化したのに気付くと、彼は進路を変更し、運の悪い彼の同僚に衝突した。しかしながら、彼は損傷した兜を脱いで脱出した。」¹²⁴⁾「済遠」は、危機が継続し、その時、旅順港に向けて走った。その場所では、戦いに関する出鱈目な話を広め、彼の艦砲は全て無力にされたと主張した。しかし、戦線と技術士の将校がその船を検査し（非公式に実施されたと思われる）、〔その結果〕後ろの6インチ砲が座部から取り外されていたとはいえ、ヒューズがとんだ砲身に関する彼の主張が虚偽であることが分かった。他の記事では、彼の大砲は、彼に「名誉の」退出をさせるために、大型ハンマーで損傷を与えられていた。遂に、方の危機は、外国人技術士に視線を向けた。外国人技術士は、旅順港で「済遠」から陸に上がり、そのような艦長の下でこれ以上仕えることを拒否したのである¹²⁵⁾。方は、処刑された。

しかし、方を中傷された英雄であると見る者がいる。豊島海戦における方の臆病に関する報告では、そのとき「広乙」を失った林国祥の嫉妬から生じたと言われた。また、劉歩蟾が方について李鴻章に嘘をついたとも言われた。もう1人のいかかわしい偽りの目撃者は、かつて「済遠」の初代水雷将校の^{ぼくしんしょ}穆晋書であった。穆晋書は、豊島海戦で水雷を発射した失敗を咎められ、方により免職にされた¹²⁶⁾。方は、彼の最初の将校である沈寿昌が死去したにもかかわらず、できる限り長く豊島で戦ったと言われ、沈寿昌は、方の余りに近くに立っていたので、方は、その男の死により血まみれになったと言われた。この最初の一撃は、1人の千総（sub-lieutenant）も殺し、舵取り装置、ボイス・チューブ、エンジン電信装置、そしてその他の装置を大破させた。もう一撃は、8.3インチ砲の弾薬巻き上げ装置を粉碎した。三発目は、この砲座を貫通し、7名の将校と兵士を殺し、14名以上を負傷させた。日本軍は、最初は白旗を掲げた。方の砲撃の一つは、敵の艦橋に当たり、敵の提督を殺した。その身体は、空中でくるくる回転するのが見られた。日本艦船は、他の日本軍艦がやって来たときだけ救済された。そして、その時、船の舵取り装置が修繕されて、「済遠」は、どうしようもなく均衡が破れた戦いとなったものから逃げ去らねばならなかった。船尾の砲台は、その時にはほとんど巻き込まれていたかも知れない。御自慢の「吉野」

が、のろまの「済遠」を捕まえられなかった。何故なら、「吉野」は、方の砲撃により船首を押さえ付けられ、「済遠」の甲板はごった返し、そして「済遠」にとって幸運なことに、日本側の砲撃の幾つかは不発弾であった。¹²⁷⁾ 李鴻章が、豊島沖での大失敗から約7週間後に起こった黄海海戦後まで方の処罰について上奏しなかったのは、興味深い。

方を支持する者は、彼は黄海海戦において臆病ではなかったと言った。しかし、大砲が役に立つ間は、彼の船を指揮した。実際、おそらく嫌気がさして方から離れた外国人将校——その人物はホフマンであった——は、船を指揮するようなことはなかった。彼自身は、次のように陳べている。

私がこれまで夢に見た中で最も凄まじい戦いであった。方艦長は、勇気と能力をもって済遠を指揮した。我々は、船上で7名か8名を殺され、午後2時から3時の間まで、できる限り速く撃ち続けた。その時間、我々はひどく損傷し、交戦の現場から退去せねばならなかった。船尾に備え付けられた我々の大砲は、16センチのクルップ製であるが、無力にされた。船首部にある2門の大砲はギアを破壊され、それで使用できなくなった。そして、どの点から見ても、船は使いものにならなかった。それで方艦長は戦闘から離脱することを決定した。……8時頃にやって来た艦隊の残りの船の5時間か6時間前に旅順港に到着した。その途中で、我々は別の船と衝突し、その船は沈んだ。済遠に損傷を与えたことから、私はその別の船が我々を衝角で突いたと言うべきである。ところで、船の損傷は、全て正横後である。水が激しい勢いで規則正しく済遠に流れ込んだ。しかし我々は、防水ドアを閉じ、恙無く処理した。方艦長に申し立てられてきた臆病に関する問責は、差し当たり確認できないと私は考える。彼は自分の船がもはや使えなくなるまで指揮したのである。¹²⁸⁾

ホフマンは、方が船を離れたのは、船がもはや航海に耐えないと認識したからであると結論付けた。

方の一味の者も、日本側の証拠を提示できた。陳璧光が伊東に威海衛の引き渡しを伝えたとき、日本人は、なぜ方が斬首されたのか尋ねた。伊東は、豊島の証拠に基づけば、その男は勇敢な戦士であると感じた。陳は、「これは皇帝陛下の命令のためです。丁は、それを実行するのは不本意でした。」と返答した。¹²⁹⁾

確かに方伯謙の事例は、込み入っていた。ヒューズがとばされた大砲、あるいは破壊された大砲や、艦首か、あるいは「^{よこばり}横梁の船尾寄り (abaft the beam)」に受けた損傷等々に関して相反する技術的証拠を含んでいた。道義的判断は、不十分であった。しかし、軍法会議の取り調べは、なかった。

行動とその結果に伴って起こる判断の様式には、他にも矛盾が存在した。「広甲」号の艦長であった呉敬榮は、^{こけいらい}彼が黄海海戦を放棄したのは、方が戦うのを止めたときと推定されるのに、彼だけが罷免された。そして、¹³⁰⁾彼らの艦船が威海衛の港で魚雷攻撃されていたときに、陸上で娼婦を連れていたと噂される男たちは、どうなのか？ 確かにこれ以上の怠慢はあり得ない。「定遠」は、前日の夜に沈められていた。そして、「定遠」が居なくなったため、状況は平和的であると弁論することは、ほとんどできなくなった。葉祖珪も存在した。葉は、丁提督の指揮のもとで、彼の「済遠」が2月7日に沈められたとき、陸上にいた。彼の務めが、いま言及したばかりの二

人の艦長より正当であったかどうかは、分からない。これらの人たちの誰一人として最も重い刑罰が科されたという証拠は存在しない。実際、葉祖珪は、その後長期に亘る海軍の経歴を有した。¹³¹⁾ いずれにせよ、黄海海戦の後に李鴻章は、葉祖珪と邱宝仁（上述した職務怠慢ペアの一人）の昇進を薦めなかった。しかし、このことは我々に多くを語らない。

もう一つの事例は、^{さいていかん}蔡廷幹であった。蔡は若い頃、中国教育使節の一員として米国に派遣された。そのとき、「戦う中国人」という^{あだな}渾名を付けられた。彼は、李とともに長い海軍の経歴を持ち、1895年2月7日の絶望的な包圍突破攻撃に参加させられた魚雷艇の船長の一人であった。これらの船長を全員斬首すべしとの指令が下されてから、西太后は事件の咎を李鴻章の両肩に転嫁した。そして蔡は、他の生き残りとともに降格され、数年間辺境に流された。1908年に、袁世凱の執り成しで、彼は等級を回復し、間もなく提督になった。これは、おそらく正当であろう。というのも、蔡は臆病者ではなかったからである。負傷したとはいえ、彼は、魚雷艇が沈没するまで船にとどまった。それから彼は捕らえられた。しかし、正当性は、一貫性から完全には分離され得ない。通常の斬首に向けた命令は延期された。この措置は明らかに、¹³²⁾ 証拠に関する詳細な審査を経てというよりは、むしろ西太后の気分により決められた。

軍人でなかったとはいえ、^{ちようはいりん}張佩綸も、興味深い事例を与えてくれる。これまで見たように、天津で幾つかの職務を果たす間、張は李鴻章の兵器製造工場を預かっていた。1894年の秋に、彼は免職された。後になってから書簡の中で——それは、決して完全に客観的ではないが、それでも書き留めるに値する——彼の失脚は、日本政府職員により植え付けられた噂に関わりがあると告発した。張佩綸が日本政府職員に長らくけんか腰で接してきたために、その長官は怒っていたのである。また天津では、張が李鴻章の娘婿になり、たいそう寵愛されていると、陰口をたたかれた。そして、北洋艦隊に在籍する福建閩の連中は、張が馬江の役（1884年8月）について多くを知りすぎていることを恐れ、¹³³⁾ 陰謀を図ったのである。もし張佩綸の事例において正義が行われていたなら、誤った道によって〔正義が〕もたらされたことになるように思われる。

19世紀後期の中国における海軍の報償と懲罰に関する制度は、予測不能性と不公正とともに機能したと結論づけられるかも知れない。この海上戦争の間に自殺した全ての者が、古来の習慣によるか、あるいは敗北した海の英雄の倫理観により自殺することはあり得ない。そう決めてかかるのは、穏当である。なかには、自分は正しいことをしただろうという絶望的な不確実から生じた例もある。林泰曾の事例は、この議論に対し最も適合するように思われる。「鎮遠」は最後に船が威海衛に入ったとき何かと衝突した。その後、彼は自殺した。損傷は、かなり深刻であった。というのも、船は陸に乗り上げられねばならなかったからである。しかし、障害物が何であるか、あるいはどこに過失があったのかについては、明らかに何も確実なことはなかった。宮廷ですら、単なる専門的事項からはかけ離れているが、船が水雷に衝突したのか——他になぜそれほど大騒ぎするのか尋ねた。李鴻章は、十分に調査するよう命じられた。しかし、その事例は、〔以下のように〕非難し返されて失敗した。何故そのような意気地のない男が、そのような重要な指揮権を与えられたのか、と尋ねられたのである。林に替わった楊用霖（しこたま攻撃された提督により指名された）は、信頼できるのか？ 宮廷は、「平遠」の艦長である李和練（黄海海戦後、李鴻章に¹³⁴⁾ 推薦されたのではなかった）が、その職には適格であると聞かされていた。等々である。

林泰曾が自殺した直後に宮廷が発した問題は、幾つかは的を得ていた。しかし、それ以外は、

海軍人員の事柄について熟知していないのにあれこれ干渉してくる儒教的君主制に特有の現象を例証している。林は、職責に関する最も高い思想を心得た上で行動したかも知れない。しかし、自分が法廷では相応に扱ってもらえないことを、おそらく恐れたのであろう。ともかく彼は、海軍軍法会議の予備審問は言うまでもなく、誰の証人にも応じられなかった。従って、彼の死は、二重の意味で高くついたのである。彼の後任の楊用霖も、降伏後に自殺した。

最も有名な自殺は、丁提督の自殺であった。多分彼は、礼儀正しくあるべきという観念に支配されたのであろう。他方、彼は、近代海戦の道義的・技術的可変性の間に横たわる関係に関する合理的考慮によるのと同じくらい、痼癢によって鼓舞される攻撃の下に長らく晒されてきた。

李鴻章の艦隊における懲罰制度は、近代海軍が必要とするものと一致していなかった。その制度の変革を効果的な行うには、皇帝と皇海軍の従僕との間に調査委員会を介在させる必要があったろう。それは、技術的専門家が配置された委員会である。そして、彼らは、幾つかの状況の下で釈明する義務を一番負っているのは、金属の疲労であったのか、あるいは道徳上の疲労だったのかを裁定するよう試みることができた。誰一人として、天子の神聖な判断に敢えて疑義を唱える者はいなかった。訓練については、近代海軍は、儒教国家中国における長年の伝統とは相容れなかったのである。

註

- 1) Li Chien-nung, *The Political History of China, 1840-1928*, tr. Ssu-yu Teng and Jeremy Ingalls, New York, 1956, pp.127-139. に基づく要約である。
- 2) 日本の兵力に関する数字は、W. H. Beehler, "A Review of Japanese Naval Financial Policy," *United States Naval Institute Proceedings*, 37.3: 789 (September 1911) に拠る。他の文献は、必ずしも同意しているとは限らない。例えば、"Vladimir," の87頁と168頁は、27隻の主要な艦船に関する情報を与えるに止まる。
- 3) 日本の設備については、Hilary A. Herbert, "Military Lessons of the Sino-Japanese War," *North American Review*, 160: 685-698 (November 1894) が語っている。日本の造船所については、ルイス・エミール・バーティン (Louis Emile Bertin) により作り上げられた。Alfred Vagts, *Defense and Diplomacy: The Soldier and the Conduct of Foreign Relations* (New York), p. 184 を参照のこと。
- 4) E. B. Potter and J. R. Fredlund, eds., *The United States and World Sea Power* (New York, 1955), p. 420. はアナポリス海軍兵学校について陳べている。Vagts, p. 184 は、日本における訓練について説明している。
- 5) W. H. Wilson, *Ironclads in Action*, II, 62. "Vladimir" と井上十吉は、若干違った数字を出している。
- 6) 例えば、軍隊を準備するよう彼に命じた、^{りょうじゅうほう} 廖寿豊への諭令を参照のこと。『清季外交史料』巻97, 1頁, 1894年10月10日付。丁提督は時折、報告書を直接提出した。新しい軍務処に対する報告書は、『清季外交史料』巻100, 9頁, 参照。
- 7) 総理衙門は時折、地方の防衛を強化するために指令を発した。李鴻章を通じて、閩浙総督が1894年7月3日に受け取ったものに関して、『清季外交史料』巻92, 2頁。また、『清季外交史料』巻95, 4～6頁に、台湾巡撫による同様の諭令への1894年8月31日付の返礼がある。
- 8) 南洋の艦船の受け取りについては、『清季外交史料』巻93, 2～3頁, 1894年7月18日付、及び『清季外交史料』巻93, 17頁, 1894年7月29日付, 参照。後者において、邵友濂は、北洋艦隊の助力も求めていた。8月末に、彼は再度それを求めている (『清季外交史料』巻95, 4～6頁)。南方の海域で使える艦船が多くなかったことは、1895年4月の澎湖島の戦い以後、英国船で脱出した官員もい

- たとはいえ、中国軍は帆船で撤退したという事実により証明される。洪棄父「台湾戦史」『中日戦争』六、333頁、348頁、参照。
- 9) これら南洋艦隊の艦船に関する記事については、以下で、黄海及び威海衛の海戦を論じる際に述べるので、参照のこと。
- 10) 他の艦隊に関するノートは、“Bibliographical Notes,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.1: 206 (1895) を参照のこと。この史料では、1895年12月5日の日付がつけられた、「中国戦場における外国艦隊 (Foreign Squadrons at the Seat of War in China)」と題されたドイツ語の論文が引用されている。一人の米国海軍官員が、世界中で中国が日本よりも優れた艦隊を持っていると考えていると所見を述べていた。Ensign Frank Marble, USN, “The Battle of the Yalu,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.3: 521 (1895) を参照のこと。外国人による意見の全てが、李を優位と見なしたわけではない。1894年7月にハートは、「中国は戦線に戦争物資を到着させている。そして、それが如何にお粗末なものであるかを知って、身の毛もよだつ思いをしている。……」と陳べている。Stanley Wright, *Hart and the Chinese Customs*, Belfast, 1950, pp. 642-643.
- 11) 姚錫光『東方兵事紀略』〔左舜生『中国近百年史資料続編』所収。以下同じ〕194頁。
- 12) 護衛については、7月16日付の李報告を参照。『清季外交史料』巻92、12～14頁。日本が特にこの遭遇戦を予期していなかったこと——すなわち、彼らの諜報活動がそれほど正確ではなかったこと——は、『中日戦争』六、30～35頁に引かれているように、「高陞」の沈没に関する東郷平八郎の議論の中で仄めかされている。その中で東郷は、その遭遇戦を予期していたことに言及していないのである。
- 13) 豊島海戦については、H. B. Morse and H. F. MacNair, *Far Eastern International Relations*, Shanghai, 1928, pp. 577-578; “Vladimir,” pp. 95-97; H. W. Wilson, *Ironclad in Action*, II, p. 67. 及び張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」『清華史報』10-1 (1935年1月)、63～64頁。
- 14) 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」64頁、は、その電信の改竄 (editing) について意見を述べる。池仲祐「甲午戦事記」〔左舜生『中国近百年史資料続編』所収〕375頁、及び姚錫光『東方兵事紀略』198頁も、より大きな部隊を出動させなかったことに言及する。
- 15) “Vladimir,” p. 95-97 の記述に拠った。
- 16) 欧州からは、ちょうど新型のグルズン製作所製1.97インチ・4ポンド速射砲が到着していた。「済遠」の修繕はこの速射砲2門を取り付けることも含まれていた。W. Laird-Clowes, “The Naval War Between China and Japan,” in T. H. Brassey, ed., *The Naval Annual (1895)*, p. 98.
- 17) 威海衛＝鴨緑江ラインについて言及するのは、張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」73頁。日本軍の上陸については、例えば、9月12日には、10,000の兵士、4,000の苦力、350匹の馬が上陸した。西岸の仁川を通してやって来た、これらの増援隊のお陰で、9月15日に平壤が陥落した (“Vladimir,” p. 118)。威海衛＝鴨緑江ラインについては、下の註27も参照のこと。
- 18) マクギフンの記述は、8月2日の偵察に当てはまる。H. W. Wilson, *Ironclad in Action*, II, pp. 80-81.
- 19) 『清季外交史料』巻94、3頁。張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」74頁。
- 20) 『清季外交史料』巻94、6頁。
- 21) 『清季外交史料』巻94、8頁、10頁に、李（2件）と宮廷からの記事がある。一番最後の記事の日付は、1894年8月6日。
- 22) 軍機処から李鴻章へ、8月5日付、『中日戦争』三、22～23頁。
- 23) 『清季外交史料』巻94、10～11頁、1894年8月6日付。
- 24) 池仲祐「甲午戦事記」376頁、382～383頁。〔載が李鴻章に送った密電の中で〕丁は秘密裏に敵と通じているとも、言われた。
- 25) 『清季外交史料』巻94、11頁。
- 26) Laird-Clowes, “The Naval War Between China and Japan,” p. 99. 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」74～75頁、は、急襲は、軍隊の移動を隠すための見せ掛けであり、中国は欺かれたと言う。H. W.

Wilson, *Ironclad*, II, 80-81, も急襲に言及する。急襲に関する李の報告は、『清季外交史料』巻94, 13~14頁, 17~18頁, に見られる。

- 27) 悪天候を理由にすることについては, Laird-Clowes, "The Naval War Between China and Japan," p. 99. で言及されている。レアード・クローズは, その呼び戻しが「李鴻章の申し立ての結果」であると言うマクギフンを引用している。1894年8月29日付の建議で, 李は(丁をかばって)艦隊は, 積極的な攻撃に使うのではなく, 旅順港や威海衛に限定されるような北洋の門戸を守るために使うのが適切であると主張していた。『中日戦争』三, 71~73頁。これは, 私がこれまで見つけることのできた中国官僚による唯一の「ライン」への言及である。マクギフンは, そのラインが, 「いわゆる威海衛への砲撃」の直後に, 総理衙門によって引かれたとし, 山東から鴨緑江の河口に引かれたラインの外側には行かないことが「最も前向きな指令」であると主張する。McGiffen, "The Battle of the Yalu: Personal Recollections by the Commander of the Chinese Ironclad Chen-Yuen," *Century Magazine* (August 1895), p. 586. を参照のこと。H. W. Wilson, *Ironclad*, II, 80-81, は, 威海衛=鴨緑江ラインに言及し, それを李鴻章からの指示に関連させている。A. T. Mahan, "Lessons from the Yalu Fight," *Century Magazine*, 1.50: 629 (August 1895) は, ラインについて言及する。Edwin A. Falk, *Togo and the Rise of Japanese Sea Power*, p. 177. も言及する。これらの記述は, 基本的にマクギフンに基づいている。その場所は, 基本的には一つであるが, ラインは李鴻章によって引かれたように思われる。
- 28) 想定される日本の購買に関する李の報告は, 『清季外交史料』巻94, 25頁, 1894年8月12日付。包遵彭『中国海軍史』(海軍出版社, 1951年) 297頁, は, 李が買収されたという噂について言及する。Falk, *Togo and the Rise of Japanese Sea Power*, New York and Toronto, p. 177, も同様の言及をしているが, 情況証拠によりその考えは強化されると認められるのに, 彼はその考えを値引きした。
- 29) 『清季外交史料』巻94, 13~14頁, 1894年8月12日及び13日付。
- 30) ハートについては, 『清季外交史料』巻94, 14頁。丁汝昌の告発者は, 広く拡散していた。すなわち, 一つは北京の礼部であり, もう一つは広西省の地方監察官である。1894年8月16日から25日までの期間中の告発については, 『中日戦争』三, 39頁, 56~58頁, 参照。
- 31) 李鴻章の報告とその後の指令については, 『清季外交史料』巻94, 17~18頁, 18頁, 20頁, 日付は8月22日, 23日, 26日。軍機処による8月25日の指令は, 『中日戦争』三, 58頁。
- 32) 『中日戦争』三, 67頁。
- 33) 『清季外交史料』巻95, 1~3頁, 1894年8月31日付。李は, 丁の護衛艦を大沽港に派遣させることに警戒していた。『清季外交史料』巻94, 22頁, 1894年8月28日付。
- 34) 1894年8月31日の不平は, 林と劉が「愚かにして臆病」であり, 船室に身を隠す傾向があると告発している。丁の限界は, この二人に責任を負わされた。そして皇帝は, 彼らを免職するよう命じた。これは, 拒否された。張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」75頁, 参照。
- 35) 『清季外交史料』巻95, 3頁, 1894年8月31日付。
- 36) 艦船の購買に関する議論は, 『清季外交史料』巻94, 20頁, 1894年8月27日付; 巻95, 7頁, 9月2日付; 巻96, 13頁, 9月23日付を参照のこと。福建道監察御史の安維峻は, 李鴻章に購買を執行させることに反対する。安は, 李は既に彼に割当られた数〔の艦船を〕を持っているとし, 南洋艦隊を増強すべきことを陳べている。安は, 李, 劉, 林を攻撃し, 豊島沖の海戦(牙山に近い)において, 「広乙」がよく戦ったと陳べている。このことは, 彼にとって艦船よりもむしろ指揮官が重要であるという真理を証明していた。『中日戦争』三, 77~78頁, 1894年8月31日付, 参照。グルゾン製の大陸砲については, Laird-Clowes, "The Naval War Between China and Japan," p. 109, 参照。
- 37) 井上十吉『日清戦争』第一部 (Inoue Jukichi, *The Japan-China War*, Shanghai, Pt. 1), 1頁は, 日本側の増強について議論し, 朝鮮西岸に軍隊の上陸を遂行するうちに中国軍と海上で接触することを日本は予期していなかったと陳べている。多分日本は, 李鴻章の防衛線が, 威海衛と鴨緑江の河口, 或いは大連湾との間にあると承知していた。

- 38) G. A. Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan*, New York, 1921, pp. 139 ff (以下) は、技術的な比較を長々を行っている。H. H. Wilson, *Ironclads*, II, pp. 112-113, 及び Table XX, p. 307. それに, Hilary A. Herbert, "The Fight of the Yalu River," *North American Review* (November 1894), pp. 513-528. も比較を行っている。
- 39) 『皇朝政典類纂』巻324, 11頁。
- 40) 池仲祐『海軍大事記』339頁, では、彼を「総査」(inspector-general) と呼んでいる。Laird-Clowers, "The Naval War Between China and Japan," p. 101, では、彼を Inspector of Coasts and Adviser to the Admiral と呼んでいる。Tyler, *Pulling Strings in China*, p. 39, では、彼を Co-Admiral と呼んでいる。
- 41) Tyler, *Pulling Strings in China*, p. 60. Vagts, *Defense and Diplomacy*, は、「軍事使節と教官」の章で、中国の提督 (general) の等級を持つ、フォン・ハンネケンに関する諸問題について議論している。
- 42) Tyler, *Pulling Strings in China*, pp. 36, 40-41, 43-44, 50, 64.
- 43) *Ibid.*, p. 52.
- 44) *Ibid.*, p. 62. Philo N. McGiffen, "The Battle of the Yalu: Personal Recollections by the Commander of the Chinese Ironclad Chen-Yuen," pp. 585-604.
- 45) 姚錫光『東方兵事紀略』201頁。
- 46) 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」78頁, は、マクギフンを引用している。
- 47) 詳細については、後続する戦闘に関する記述と付録 C と D の「艦船」及び「中国人名録」を参照のこと〔本稿では割愛する〕。海軍の権限が不確定なハンネケン自身は、鴨緑江における李鴻章の艦長は経験不足であると陳べている。Laird-Clowers, "The Naval War Between China and Japan," p. 116.
- 48) Daniel Henderson, *Yankee Ships in China Sea* (New York, 1946), pp. 249-250, は、パーク・ベンジャミンによる記述を引用している。マクギフンもまた、「中国海軍における司令官 (Commander) の等級に熱狂的に固執した。給料は受け取っていないのに、帝国の諭令によってその職に就いたと主張した。……」Falk, *Togo and the Rise of Japanese Sea Power*, New York and Toronto, p. 176, は、マクギフンを艦長 (captain) と呼んでいる。
- 49) Tyler, *Pulling Strings in China*, p. 44.
- 50) 各軍艦に配属された外国人は、以下の通り。「定遠」に、フォン・ハンネケン、タイラー、ニコルス (第一砲術長), アルプレヒト (主任技術者)。「鎮遠」に、マクギフンとヘックマン (第一砲術長)。「致遠」には、パーヴィス (技術者)。「濟遠」に、ホッフマン (技術者)。ニコルスとパーヴィスは、死亡した。Laird-Clowers, "The Naval War Between China and Japan," p. 110, 参照。包遵彭『中国海軍史』(1951年) 310頁は、これらの人物の中国名を記している。威海衛における最終段階では、異なったグループが存在していた。井上十吉『日清戦争』第二部「威海衛の陥落」, 25頁, 参照。「呉 (Woo)」は、Wu Ying-fu [漢字表記不明] である。LaFargue, *China's First Hundred*, Pullman, Washington, 1942, pp. 78-82, 参照。
- 51) 詳しくは、井上十吉『日清戦争』第一部「海洋での海戦」; "Vladimir"; Falk; Marble; Potter and Fredlund; H. H. Wilson, *Ironclads*, II, を参照のこと。
- 52) Falk, p. 183, は、戦闘は想定外であったことを仄めかし、戦線が変則的になった理由をかように説明している。Marble, p. 506, は、もし丁が戦闘を予期していたなら、彼は接触を避けたであろうと陳べた (しかし、W. P. ホワイトは、マーブルの論文に関する議論の中で、黄海の河口にある彼の港では見られない状況がずっと続いたのに、丁は戦いに行った、と言う。Marble, p. 515, 参照)。
- 53) 戦闘に向けた清掃に関する詳細は、マクギフンに拠る。更に詳しく付け加えるに当たり、H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 79; Falk, p. 176; Laird-Clowers, p. 116. に依拠する。
- 54) Tyler, pp. 50-51.

- 55) 縦列対横列については, Laird-Clowes, p. 116; H. W. Wilson, *Battleships in Action*, 2 vols. (Boston, 1926), I, 102.
- 56) 討論については, H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 63-64, 参照。また, 「定遠」=「鎮遠」の装備体制に関する図解については, H. W. Wilson, *Battleships in Action*, II, 92, 参照。マーブル (L. White, p. 508 による議論) は, 砲座 (barbette) の配置を逆向きにし, 右舷の砲座は前方に最も遠くなるが, このことは右舷の一斉射撃を行う能力に影響を及ぼすだろうと言う。Potter and Fredlund, p. 425 n. は, そうした艦船は, 対象に舷側を向けてのみ最大限の砲撃を發揮できると論じている。明らかに, これは論議的になる図案であった。
- 57) H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 63-64, は, 次のように指摘する。日本軍の艦船について言えば, 日本軍の主要な非装甲巡洋艦は, フランスで建造された2隻とフランスの計画に基づき日本で建造した1隻を含んでいた。これらの3隻は, 12.8インチのカルネ砲 (Carnet gun) を各船に1門ずつ持っており, 2隻はそれらを前方に載せ, 3番目の船は後方に載せた。この設計は, 「船の一端からの砲撃を過度に展開させるという深刻な欠陥」(Ballard, p. 139) を具体的に表現していた。それでも日本軍は, 戦いの陣形の基礎を側面から最善の砲撃が可能な大砲に置いていた——それ故, 縦列陣形なのである。W. H. Wilson, *Ironclads*, II, p. 116, は, 近代的に設計されたどの大型戦艦も, 黄海沖では片側から戦闘しなかったと言う。英国海軍の「ロイヤル・サブリン (Royal Sovereign)」は, 排水量が1万4,510トンであった——「定遠」級の7,430トンを遙かに超えていた。
- 58) 1888年の北洋海軍章程における李鴻章の信号に関する適用については, 『北洋海軍章程』第二冊, 「信号旗」を参照のこと。
- 59) Laird-Clowes, p. 116, は, それらの指令は致命的であったとみなしている。Ballard, chap. 5, は, それらの指令は粗雑であるとみなしている (そして, 彼らはただ危険から一組ずつ逃避することを許可したのも同然であると言う)。Marble, p. 518, は, フォン・ハンネケンがそれらを吹き込んだと考ええる。[それに対し] レアード・クローズとバラードは, 丁に源を發したと言う。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 85-86, も, この問題を検討している。
- 60) Tyler, p. 57. 包遵彭『中国海軍史』306頁は, これに同意している。しかしながら, マハンの「レッスン」は, 横隊陣形の中央に2隻の重量戦艦を置くことは論理に適切であったという意見を開示した。このことは, これらの戦術上の問題がいかに複雑で論議的になっていたかをあらためて示しているかも知れない。
- 61) これらの問題の全てにおいて, 細部では見解の相違があったが, ここに, Falk, p. 167, の中で示された中国軍の戦列がある。それは, 戦闘中に報告されたあらゆる進展とも符合する。すなわち, 右翼から左へ, 「揚威」, 「超勇」, 「靖遠」, 「来遠」, 「鎮遠」, そして「定遠」, 「経遠」, 「致遠」, 「広甲」, 「濟遠」である。「平遠」と「広丙」は, おそらく右翼の後ろに, 遅れてやって来た。
- 62) ホワイト中尉によるマーブルへの論評の中で示された速度については, Marble, p. 514. 日本軍は, 常に縦列陣形を使っていたわけではなかった。姚錫光「東方兵事紀略」200頁に拠ると, 威海衛を襲撃した8月10日に, 日本軍は横列陣形でやって来た。Laird-Clowes, p. 101, は, 中国軍が縦列陣形を使用した例を挙げている。
- 63) Tyler, pp. 50-52. 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」78~80頁は, タイラーの記述に従っている。アランは追従せずに, この情報を付け加えている。すなわち, 「この一例として, 旗艦の司令塔から打電された指令は, その電信が将校により改竄されたり, あるいは削除されたこと, しかもこの証拠を提供した技術士官と共に後でメモを対照したことが申し立てられた。」(アルプレヒトが, 技師であった。) W. H. Wilson, *Ironclads*, II, 104, もこの事件に言及している。劉は, 6,000メートルで最初の一斉射撃を行った。井上十吉『日清戦争』第一部, 3頁に拠る。これらの諸点は, 責任を定めるために, これらの諸問題を技術的に調査する必要を明示するのに役立つかも知れない。
- 64) 日本軍は, 3,000メートルで砲撃を開始した。井上十吉『日清戦争』第一部, 3頁に拠る。Falk, p. 185, は, 丁が一斉に決闘を挑むべく, 一列に45度旋回しないことに驚いた。ここでフォークは, 丁

- の艦隊に属するインストラクターは、戦いの「前奏曲」に際しては平行して進む（line-abreast）ことを強調していたと指摘する。桅斗（指令台）の破壊は、池仲祐「甲午戦事記」378頁で言及されている。池は、他の艦船がこのことによって混乱したことを付け加えている（379頁）。
- 65) Allan, pp.30-31.
- 66) *Ibid.*, p.32.
- 67) 洗玉清「清季海軍之回遡」31頁、は、「濟遠」が「揚威」に衝突したと言う。H. W. Wilson, *Ironclad*, II, 92, は、賛同している。しかしながら、方伯謙の懲罰に関する議論の中で、後ほど本章の中では、他の証拠が伝えられている。「広甲」に関しては、井上十吉『日清戦争』第一部、42頁は、*North China Daily News* の記事を引用している。その記事に拠ると、「広甲」の艦長は、「ずっと船尾で神経を尖らせて見張っていたので、午後11時に大連湾の20マイル沖にある暗礁の上を走った」と言う。推測の域を出ないが、上手い作文である。
- 68) “Vladimir,” p.170. 及び、井上十吉『日清戦争』第一部、4頁は、これら2隻の艦船が、旧式のアームストロング製砲艦である「鎮南」と「鎮邊」であったと言う。著者の使用した出典は、不明確である。Falk, p.189, は、この記述で使用した船名を挙げており、他の諸事実とも一致する。
- 69) H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 91, は、「西京」への攻撃に言及する。97頁では、「西京」が沈められなかったことに驚きを表している。
- 70) 新聞の急報は、井上十吉『日清戦争』第一部、14頁に引用された。引用は、Allan, p.33より。
- 71) 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」81～82頁。池仲祐「甲午戦事記」377頁。『皇朝政典類纂』巻342, 11頁、は、鄧のヒロイズムに言及し、鄧の水死について詳しい。
- 72) 井上十吉『日清戦争』第一部、19～20頁は、新聞記事を引用している。
- 73) *Ibid.*, pp.19-21, は、新聞報道を引用している。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 113, は、これらの火災を列挙している。「来遠」は、ほとんど廃船に変わった。「経遠」は、沈む前に燃えた。「定遠」は、三つの火災があった。「揚威」、「超勇」、そして「広甲」は、全て火災にあった（「広甲」は、明らかに無傷で逃げ去ったのではなかった）。
- 74) H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 91; Falk, p.191, は、「比叻」を逃した原因は、欠点のある中国の弾薬に帰している。
- 75) Tyler, p.54. 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」54頁、は、この点でタイラーを支持し、「定遠」の要求は、おそらく劉步蟾のついた虚偽であると主張している。
- 76) 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」85頁。また、Falk, p.197. [「靖遠」と中国語の発音が同じ] 他の「経遠」は、黄海海戦で沈められた。
- 77) 井上十吉『日清戦争』第一部、18頁は、新聞記事を引用している。
- 78) ウィルソンは、*Battleships*, Vol.1, Chap.6 及び、*Ironclads*, II, 109-110 において、日本海軍は、6インチから8インチの速射砲の働きにより勝利を得たと結論付けている。日本海軍の12インチ大型フランス製カルネ施条砲（French Carnet twelve-inch rifle）は、30インチの装甲を貫徹することになっていた。しかし、軍艦の14インチ装甲帯への損害は、4インチを越えなかった。
- 79) 発射された砲弾、命中弾等に関する形態は、H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 91, 99, 114; H. W. Wilson, *Battleships*, I, 105; Laird-Clows, p.109; そして、McGiffen, p.601. 井上十吉『日清戦争』第一部、17頁は、中国魚雷艇の過剰使用と荒廃、そしてその結果動く速度が緩慢であることに関する新しい至急報を引用している。中国艦船は、全部で44本の魚雷管を持っていた。対する日本が持っていたのは32本であった。Tyler, p.54, は、発射は、砲弾のはねかす音に基づいていたと言う。もう一人の観察者は、隅から隅まで照準器（sight-bar）が取り付けられ、変えずに置いておかれたと言う。もう一人は、「松島」の檣頭しょうとうの角度に基づく間隔表が、のちに「定遠」の中で見つげられたと言う。Marble, pp.502, 509, に見える論評を参照のこと。
- 80) 中国軍の火薬については、H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 104; McGiffen, p.599; Tyler, pp.39-41; Laird-Clowes, p.109, 参照。マクギフンは、601頁で打ち切りについて論評する。

- 81) H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 94-96. カンニングハムは、砲弾のうち幾つかは、砂が詰め込まれていたと言う。Laird-Clowes (p. 116) は、この古い英国海軍のシンボルは幸運をもたらすと信じて、中国は弾薬に「太い矢じり印」を押したと陳べている。洗玉清「清季海軍之回遡」32頁は、批判的な論説を引用し、中国の火薬が良質でなかったこと、砲弾が適合していなかったこと——そして、収益が彼らの生産で主要な関心事であったために、誰も関心を持っていなかったと結論付けている。
- 82) 洗玉清「清季海軍之回遡」32頁は、日本側の記事を引用している。
- 83) 「黄海海戦における攻撃用及び守備用の兵器 (The Offensive and Defensive Weapons in the Battle of the Yalu)」と題された印刷物の一項に関する論評は、“Professional Notes,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.4: 897-898 (1895). 先進的な近代海軍戦争の「教訓」に関するそうした宣言は、数多く存在した。
- 84) Charles Denby, *China and Her People*, 2 vols. (Boston, 1906), II, 136-137, は、勲章の喪失に関する彼の苦悩について陳べている。日本の次の攻撃に関する憶測については、『清季外交史料』巻96, 14頁, 24頁；巻97, 2～3頁, 参照。
- 85) 井上十吉『日清戦争』第一部, 19～21頁は、新聞の特電を引用している。
- 86) 西太后の指令である。『清季外交史料』巻97, 3頁, 1894年9月29日付。
- 87) Tyler, pp. 60-61. 池仲祐「海軍大事記」339～340頁は、多くの外国人は、マクルーアを指名したのは賢明ではないと考えたと書き記している。
- 88) 新設機関は、恭親王の下に置かれた。奕劻^{えいきょう}、榮祿^{えいろく}、長麟^{ちやうりん}（全て満洲人）により助力された。『清季外交史料』巻99, 8頁, 1894年11月2日付。文廷式は、恭親王は老人で、現場から離れており、少数の支援者がいるだけであると陳べている（『中日戦争』五, 498頁）。
- 89) 『清季外交史料』巻97, 4頁, 1894年10月2日付。及び『清季外交史料』巻99, 17頁, 1894年11月8日付。〔訳註：湖広総督張之洞は、1894年11月2日から1896年1月2日に帰任するまでの1年2箇月の間、署理两江総督を兼務した。〕
- 90) 池仲祐「海軍大事記」は、1895年に〔南洋の〕「開濟」, 「鏡清」, 「寰泰」, 「南瑞」, 「福靖」の各艦船が、北洋に派遣されるよう指示されたと指摘している (342頁)。
- 91) 日本側の動きに関する李鴻章の報告は、『清季外交史料』巻97, 12頁, 15頁, 1894年10月付。日本側の計画、そしてそれが無抵抗で実行されたことについては、“Vladimir,” pp. 205-207, 参照。大連湾の占領については, *ibid.*, pp. 213-217. で取り扱われている。
- 92) 張之洞の報告については、『清季外交史料』巻98, 13頁, 10月25日付, 参照。また、『清季外交史料』巻95, 4～6頁；巻98, 1頁, 7～10頁。
- 93) 丁に関連する指令と通信については、『清季外交史料』巻99, 9頁, 10～11頁, 13～14頁, 16頁, 18頁, 20頁；巻100, 2頁——全て、1894年11月3日から10日の記事である。
- 94) 姚錫光は、丁は旅順港で断固として一戦を交えるよう李に説得を試みたが、李に叱責されたと言う。地方官僚たちとのトラブルについては、池仲祐「甲午戦事記」381～382頁, 参照。
- 95) Ballard, *The Influence of the Sea on the Political History of Japan*, Chap. 6, は、これを日本の唯一の基本的な誤りとの意見を陳べている。Falk, *Togo and the Rise of Japanese Sea Power*, p. 161, は、何れの側も戦略の親方ではなかったと陳べている。西洋の海軍でさえ初歩的な戦略思考しか持っておらず、「柔弱である」として兵学校を退ける傾向があった。
- 96) 池仲祐「海軍大事記」340頁。
- 97) Tyler, pp. 68-69. 池仲祐「甲午戦事記」382頁。
- 98) 威海衛には何隻の艦船がいたのかという問題が——例によって——存在する。バラードは、36隻とする (第6章)。姚錫光は、14隻とする (203～204頁)。“Vladimir”は26隻とする (276頁)。この食い違いの幾つかは、商船を含めるかどうかの問題であろう。ここで挙げられた名前は、交戦した数を計算に加えている。
- 99) Tyler, pp. 68-69. 彼は、意見を聞かれなかった。

- 100) 姚錫光「東方兵事紀略」203頁。李鴻章は、点検のために彼の艦船を大沽に派遣するよう命じられた。しかし彼は、艦船をそれほど遠くには派遣しなかった。大沽の道台であり曾國藩の汽船を建造した徐寿の息子である徐建寅が、点検を実施することになっていた。『清季外交史料』巻100、7頁、1894年11月16日付。
- 101) 『中日戦争』三、261～262頁、263～264頁；及び『清季外交史料』巻102、16頁、18～19頁、参照。最後の日付は、1894年12月24日。
- 102) 戴宗騫は、丁の主な敵であったが、戴は威海衛の状況について実は悲観的であったと、周馥により報告された。『中日戦争』五、212頁。丁は一度は、要塞の幾つかを爆破させようとしたが、火薬が拳銃の閃光により点火させられねばならない——いくら控え目に言っても、危険を伴う——ために、裏切り者とその試みを妨害した。他方で、丁は、丁がそこから離れるよう命じるまでは、要塞に留まるよう要塞の指揮官たち——明らかに、薩鎮冰がただ独りそこに留まっていた——に説き伏せる苦勞を抱えていた。池仲祐「海軍大事記」340～341頁、382～384頁；Tyler, pp. 67, 71; Laird-Clowes, p. 122; 井上十吉『日清戦争』第二部「威海衛の陥落」付表26, 27; “Vladimir,” pp. 278-285, 参照。詳細は、Cunningham, 参照。多くの怯懦が見られた龍廟嘴要塞の喪失に関する、李鴻章の北京への報告については、『清季外交史料』巻104、11～13頁、1895年1月31日付、参照。
- 103) その船は、9インチの砲弾により喫水線上に穴を開けられた。池仲祐「甲午戦事記」384頁。Tyler, p. 85. 葉祖珪艦長の不在については、姚錫光「東方兵事紀略」200頁、参照。
- 104) 伊藤の書簡については、池仲祐「海軍大事記」340頁、参照。
- 105) 特赦の懇願に関しては、『清季外交史料』巻103、18～19頁、1895年1月22日、参照。龍廟嘴要塞の陥落（上記の註102を参照のこと）に関与していた劉超佩は、罰せられた。丁が要塞の爆破を試みる手伝いをした者の一人は、政務官に昇進した。丁は、明らかに自暴自棄の動きの中で、威海衛区域における全陸海軍の指揮権を任された（『清季外交史料』巻104、11～13頁、13頁、1895年1月31日）。
- 106) Ballard, Chap. 6, は、丁が機会を逸したことについて多くを陳べている。“Vladimir,” pp. 282-285. も参照のこと。
- 107) タイラーは、船が沈む前に「定遠」を廃棄するよう丁を説得した。Tyler, pp. 73-74, 参照。また、“Vladimir,” pp. 288-291, それに、井上十吉『日清戦争』第二部、14～15頁。この襲撃で、日本軍は2隻の魚雷艇を失った。
- 108) 井上十吉『日清戦争』第二部、14頁。池仲祐「海軍大事記」341頁。“Vladimir,” pp. 293. 李鴻章の軍務処への報告は、『清季外交史料』巻105、22頁、1895年2月9日付、参照。裏切り者の信号は、“Capture of Weihaiwei,” *United States Naval Institute Proceedings*, 21.1: 209-211 (1895) の中で示唆されている。姚錫光「東方兵事紀略」200頁は、二人の艦長を非難している。
- 109) 山東巡撫李秉衡は、1895年2月3日と5日に、北京に打電して助けを求めた（『清季外交史料』巻104、16頁）。不幸にも、彼の懇願は、新年の休暇中に届いた。そして、返事が来た一週間前——その時には、威海衛は陥落していたのである。池仲祐「甲午戦事記」384頁。巡撫は、間もなく萊州に飛んで行った。姚錫光「東方兵事紀略」200～201頁。助けを得ようとする丁の試みに関する詳細については（陸上に泳ぎ着いたとのメッセージを含めて）、池仲祐「甲午戦事記」384頁、参照。Tyler, pp. 68-78, は、威海衛におけるモラルの粉碎について陳べている。
- 110) 姚錫光「東方兵事紀略」202頁。井上十吉『日清戦争』第二部、18頁。Cunningham, p. 41; “Vladimir,” p. 295. 残された3隻の中国艦船は、激しく外部の日本軍に発砲し、「扶桑」に損傷を与えた。捕獲を避けよとの指令については、『清季外交史料』巻104、14頁、参照。執行命令については、『清季外交史料』巻105、29～30頁、1895年2月11日。明らかに、新年の休暇は、終わっていたのである。
- 111) 降伏に関する私の記述の多くは、以下の文献をまとめたものである。Tyler, pp. 79-85; 姚錫光「東方兵事紀略」204～205頁；池仲祐「海軍大事記」341～342頁。これらの記述は、詳細は一致していない（上記、註109を参照のこと）。
- 112) 日本の旗が、座礁した「鎮遠」に掲げられた。「鎮遠」は、後に旅順港で日本のために修理された。

- 日本軍は、全く艦船を失わなかった。井上十吉に拠ると、威海衛での全戦期間中に、死者はたったの27名、負傷者は38名だけであった(『日清戦争』第二部、26頁)。
- 113) 自殺に関する李の報告については、『清季外交史料』巻106、3～4頁、1895年2月14日付。他の記事については、林紘〔「畏廬文集」〕については、『中日戦争』六、328～330頁。周馥については、『中日戦争』五、208～209頁。タイラー(80～81頁)は、劉歩蟾は、数度アヘンを飲んだ。その都度後悔し、医者呼んだ。遂にタイラーは、この勤勉な外国人医師(劉公島の病院で切断手術を行っている)に劉を死なせるよう説得した。
- 114) “Vladimir,” p. 300. Yuan Tao-feng, “Li Hung-chang and the Sino-Japanese War,” *T'ien-hsia Monthly*, 3.1: 9-17 (Aug. 1936) も、中国における内部決定の証拠として、この要求を引用している。
- 115) 『清季外交史料』巻95、16～17頁、1894年9月19日付。また、池仲祐「甲午戦事記」380～381頁。包遵彭『中国海軍史』308頁、は、「経遠」と「来遠」の両艦は、ともに——後者は戦いの終わり頃に——逃走したと言う。このことは、脱落者に関する謎の解明に寄与するかもしれない。李鴻章は、報償の事でフォン・ハンネケンを満足させられなかった。彼は、北洋艦隊を後で手放すことを処理するため何かを実行したかもしれない。池仲祐「海軍大事記」339～340頁。
- 116) 『清季外交史料』巻95、16～17頁、1894年9月19日付。「広乙」の艦長については、上記の註36にある監察官の報告を参照のこと。
- 117) Tyler, p. 66.
- 118) 『皇朝政典類纂』巻342、11頁。
- 119) 『清季外交史料』巻99、15頁、1894年11月7日付。
- 120) 文廷式による一件は、『中日戦争』五、496頁。
- 121) 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」(『清華史報』10-1)の諸箇所、参照。従順でないことを示した事件について、李鴻章は、丁は日本軍の発砲により負傷し、劉が一時的に彼と交替したと報告した。『清季外交史料』巻95、21頁、1894年9月20日付。姚錫光「東方兵事紀略」202頁は、丁は銃弾を〔腰に〕受けて負傷したとし、従って、劉歩蟾による一斉射撃による負傷ではないとの見解を提出している。
- 122) 方の船に乗っていたホフマン、そして「広乙」の艦長である林国祥は、戦闘は期待されないと言った。張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」64頁、参照。“Vladimir,” p. 95、は、正反対のことを言う。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 68、は、中国艦船は、武装解除されていなかったと言う。戦いが何時始まったかという問題について、張蔭麟は、午前6時30分にその場所にいた「高陞」の首席技術士の証言を受け容れた。“Vladimir,” p. 95、は、中国が最初に発砲したと言う(彼は、熱烈な日本虜員である)。張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」(63頁、69頁)は、正反対のことを言う。Laird-Clowes, p. 97、は、張佩綸に賛同する。李鴻章は、日本が最初に発砲したと主張した。『清季外交史料』巻93、14～15頁、1894年7月27日付。張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」(65～66頁)は、林国祥は、敵に遭遇した際の彼の行動について嘘をついたと言う。フォーク(Edwin A. Falk)は、「広乙」は、坪井の旗艦に衝突しようと試みたと言う。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 71、は、「広乙」は、弾薬を使い果たし撤退を余儀なくされる以前に37名を失ったと言う。李鴻章による褒賞の推薦書の中で林国祥が軽視されてきたことを宮廷が訝しく思ったのは、おそらく驚くに値しないであろう。上述した、註36及び註116、参照。
- 123) 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」(67頁)は、一魚雷の発射(一つのミス)を許した、彼が「伝統的な文献」と呼ぶものを精査する。“Vladimir,” pp. 349-369、は、旗の問題について検討する。「高陞」の初代将校のテンプリンは、旗について語るが、同じく「高陞」に乗っていたフォン・ハンネケンは、そのような旗は見なかったか、あるいは言及するほど重要とは思わなかった。
- 124) 井上十吉『日清戦争』第一部、15～16頁は、新聞報道を引用している。姚錫光「東方兵事紀略」202頁は、賛同している。上述した、註67も、参照のこと。
- 125) Tyler, p. 57. 井上十吉『日清戦争』第一部、15～16頁。
- 126) 張蔭麟「甲午中国海軍戦績考」65～67頁。

- 127) 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」68～69頁。“Vladimir,” p. 97, は、方に同情的な傾向がある。Laird-Clowes, p. 98, は、方の船は首尾良く発砲したという説を支持している。H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 70, 95-96, は、「済遠」に与えた深刻な損傷について書き記している。Falk, p. 163, は、通常の支援を提示している。池仲祐「甲午戦事記」380頁は、概して方に好意的であり、殺害された中国人員に関する詳細を明らかにしている。姚錫光「東方兵事紀略」199～200頁は、中間的な位置を取り、方は白旗を掲げた後で4発の砲弾を発射し、どうか「吉野」の船首を船尾より深く沈められたと言う。また、姚は、方が日本人高級将校を殺害したと「自慢げに話した」と言った。包遵彭は池仲祐に多大に依拠しているが、方が日本人提督の殺害を報告したのは不適當であると発言している。包遵彭『中国海軍史』293～296頁。
- 128) 井上十吉『日清戦争』第一部、16頁は、上海の *China Gazette* を引用しているが、日付はない。この史料は、H. W. Wilson, *Ironclads*, II, 99-101, でも引用されている。また、ウィルソンは、マクギフンを引用している。マクギフンは、方の大砲は、船尾の追撃砲を除いて、黄海海戦後も全て破損していなかったと言う。
- 129) 張蔭麟「甲午中国海軍戦蹟考」『清華史報』10-1, 67～68頁。“Vladimir,” p. 97. 東郷自身が豊島海戦で方に非常に深い印象を受けたことは、東郷の日誌には見えない。東郷は、白い日章旗と彼が「済遠」を追撃したことに言及する。東郷は、方が戦わなかったとは言わないが、方が追撃を止めたのは、彼自身の旗艦からそうするよう指令を受けたからであることを報告していない。明らかに、「高陞」の沈没がより重要であると思われる。東郷による記事は、『中日戦争』五、32～33頁。
- 130) 『清季外交史料』巻96, 13頁, 1894年9月23日付。
- 131) 葉祖珪については、付録Dの「中国人名録」、参照。〔訳註：原書の「中国人名録」に葉祖珪の項目がある（289～290頁）。それに拠ると、葉祖珪は、福州船政学堂の出身で、1878年にはグリニッジ王立海軍大学に留学している。1881年以来、李鴻章に仕え、1894年の黄海海戦当時、「靖遠」の艦長。海戦後、李鴻章から昇進の推挙を得られなかった。威海衛で「靖遠」が沈められた時、陸上にいた。当時の階級は、「副将」。1899年に、不名誉から脱して「復職した」。1904年に、広東艦隊の提督にして、総理南北洋海軍となる（包遵彭『中国海軍史』138頁）。1905年、死去。〕
- 132) 蔡廷幹については、LaFarge, *China's First Hundred*, pp. 78-82. 参照。
- 133) 張佩綸の書簡は、『中日戦争』五、224～227頁、にある。また、ハンメル『清代名人伝略』における「張佩綸」の項目も参照のこと。〔Arthur W. Hummel, ed. *Eminent Chinese of the Ch'ing Period, 1644-1912*, I, pp. 48-49.〕
- 134) 審問については、『清季外交史料』巻100, 9頁, 1894年11月20日付, 参照。池仲祐「海軍大事記」339～340頁は、船は岩に衝突したが、丁はそれは水雷であると言ったと陳べる。姚錫光「東方兵事紀略」203頁は、船は11月22日に座礁し、エンジン室から船尾までの約9メートルが、幅1.5メートルにわたって損傷したと陳べ、船を修繕するために江南製造局から派遣された6名の外国人技術者が8日間を費やしたと陳べている。

＜付＞結論

原書：John L. Rawlinson, *China's Struggle for Naval Development 1839-1895*,
chap. X, pp. 198-204, Harvard Univ. Press, 1967.

中国艦隊の近代化に関する物語は、日清戦争と共に唐突に終わるわけではない。我々は、それをよく追跡したほうがよい。中国の内外では、一様に競争が激しかった。南洋艦隊を建設中の張之洞は、——総理衙門が招待状を出したとき、結局は北洋艦隊の代行とはいえ——ラングに復帰を勧めようと試みた¹⁾。どれほど注文を出されようと、外国造船業者は、相変わらず熱心に中国から注文を取ろうとした。戦後に海関業務に携わったタイラーは、休暇でジェノアを通過したとき、イタリアの造船業者を引き留めて長話をした。タイラーは「中国のために、別の艦隊を購入する目的で」帰国しており、イタリア人は彼を「最初にねらい打ち」したかったと噂されていた。タイラーは、その「実に不愉快な話」を否定したが、それにもかかわらず広範に受け入れられた²⁾。ちょうど同じ頃、ドイツ人納入業者は、フォン・ハンネケンが艦船の購買と訓練員の雇用を求められたとの知らせによって勇気づけられた³⁾。1898年に、ロード・ベレスフォード (Lord Beresford) は、北洋艦隊に属する11隻の艦船を記載しているが、その中には3隻の3,400トン級ドイツ製巡洋艦が含まれる。そして、南洋艦隊——ほぼ同じ大きさのドイツ製巡洋艦6隻を持つ艦隊——に属する15隻の艦船が記載されている（南洋艦隊には、「旧式の」400トン級イギリス製砲艦も含まれるが、おそらく20年前に購入された旧式のアームストロング船であろう⁴⁾）。

連想されるのは、海軍の近代化に関する限り、日清戦争は何の教訓も与えなかったことである。ラングは中国に戻ってこなかったが、戦後の艦船購買計画について、「中国が一様性を考えず、手当たり次第に艦船を注文するのを見るのは、とても残念である。私は、この問題を李鴻章に話した。そして彼は、彼らが北京で犯しつつある誤りに気付いた。李は、海軍再編計画を立案するよう私に懇願した。私は今、自分の乏しい時間を割いてそれに取り組んでいるところである。私は、中国人が同じ間違いに再び巻き込まれているのではないかととても心配している。」と陳べた⁵⁾。そして、事の顛末は、その通りに進行した。1914年に至ってもなお、イギリス海軍の観察者は、王朝の下か共和国かに関わりなく、中国官僚が海軍問題を指揮する際の「ぐらぐらした態度」について論評している⁶⁾。しかしながら、何も変化しなかったというのは、事実ではない。例えば、1904年に福州船政局は、遂に専門の海軍司令官（葉祖珪）の下に置かれた⁷⁾。

しかしそれでも、日清戦争後の王朝海軍史について更に深く研究することは、大いに学問的価値がある。それがいかに設立されたとしても、対日戦争後、中国海軍は、戦争の場で検証されなかった。そして、検証されなかったのであるから、軍事機関の有効性を測定することは、ほとんど出来ないのである。したがって、中国海軍が厳しく検証された時期の中国海軍近代化について検討してきたことを要約しなければならないのである。

中国は、西洋海軍の衝撃にとっても良く反応した。近代的艦船の建造や兵士の訓練を含め、数多

くの方面における業績は、深い印象を与えた。ところが、反応は遅々としていた。それは適応性に欠けると性格付けられねばならない。我々は、19世紀に中国の新しい未経験の艦隊が西洋海軍に打ち負かされると予測するかもしれない。しかし、その中国艦隊が近代化を開始して間もない日本海軍に敗れたこと、それが重要である。

問題は、なぜ中国の反応が適応性に欠けていたのかである。最も頻繁に使用される説明は、王朝が衰退していたことである。しかしながら、西洋の学者の中には、「王朝の衰退」という概念が、十分に包括的な分析装置であることを承服しない者もいるが、実情は、統治民族の道徳的特質への儒教的拘泥に基づいている。中国経済は、この特殊な「衰退」期間中、ずっと拡大していたかも知れないのである。⁸⁾ 中国は、1880年代に至ってなお、西洋列強を相手にした場合でさえ、全ての武力衝突に敗れたわけではなかった。海軍が建設され、或いは購入されたことを、我々は知っている。調べてみると、満洲族の衰退は、興味深いアンビバレンスを示している。

実際、この特殊な王朝の衰退は、——軍事上の劣化、海からの敗戦、叛乱、宮廷の指導力の弱体化によって示されるように——海軍の革新を妨げるのと同じほど海軍の革新を手助けした。叛乱の間、弱まった王朝は、曾国藩や李鴻章、左宗棠のような中国人地方官僚に依存する度合いを強めなければならなかった。このことは、それら諸官僚の権力と名声を強めることを意味した。彼らは各自、軍事改革か、あるいは海軍改革に対する関心を高めた。そして、彼らの個性がどうであれ、工場施設を建設する自由、あるいは艦船を購入する自由を持っていた。彼らが手に入れた自由は、アヘン戦争中及びその直後に散発的に実験を行った林則徐あるいは広東紳士が持っていたよりも、大きな自由であった。

一方で、王朝の衰退は、海軍の革新を手助けした。西洋人を面白がらせた旧水師は、もちろん指導力の全般的な低下によって影響を受けた。満洲時代初期ですら、水師は有力な道具ではなかった。19世紀には、水師は大きな関心を持たれておらず、変化に反抗的態度をとった。旧水師は、我々の期間中に完全に解散されたわけではなく、資金面で新しい艦隊とある程度競り合ったとはいえ、海軍近代化は、凝り固まった職業的保守主義によって妨げられなかったと言ってもよい。それは、19世紀のイギリスにおいても、同程度は存在したのである。時たま宋晋という人が、旧式の軍用ジャンク船は充分に有用であると言ったかも知れないが、本研究の中に現れた水師の指揮官は、彼らの艦隊が依然として維持されている場所であればどこでも、新しい艦船の指揮官としてか、あるいはくだらない茶番劇の役者として現れた。彼らにとって、海軍近代化は、ほとんど異次元の世界で起こったことなのである。

他方で、王朝の衰退は、海軍近代化の努力を妨害もした。叛乱後に中央権力が相対的に弱体化したために、中国の指導者たちの間で競争し合う機会が増えた。そして、中国は海軍を購買すべきか、あるいは建造すべきかというような基本問題は、未解決のまま放置された。利害が複雑で全く個人的なライバルたちの闘争になりやすかったからである。1884年に、米国公使は、北京に次のように問題を提出した。「李鴻章、あるいは左宗棠が行ったことは、国家の富強を目指したものかも知れないが、ただの突発的で無益な奮闘に過ぎない。君主が指令を出し、帝国全体に浸透させ、そして最終的に中国を、そうあるべきもの、すなわち強く、賢明で、文明化された国家にするような、安定した、豊かで、包括的な政策の成果と見なすことはできないのである。」⁹⁾ この点については、統率力が不十分であったために、物語の個々の局面における意思決定やモラル

に影響を及ぼした。王朝の運命が西太后の手中にあったという事実は、多分に一つの偶然であり、実際に制度的あるいは経済的な術語では説明できないのである。王朝の衰退に関する儒教理論は、そうした現象を道徳的な術語で説明したが、全く適切さに欠けているわけではない。

太平天国の乱を鎮圧したことにより、王朝を救済した人々の心の中に「復興」気分が生じた。この点においても、王朝の衰退は、海軍近代化を妨げた。復興という概念は、「王朝の衰退」という考え方と同じくらい、中国史の慣行の中に深く埋め込まれていたのであるが、「中国の学問」（儒教的価値及び制度に関する全ての領域）を社会の中核として持ち続ける一方で、中国近代化の担い手たちに、実利主義的目的のために「西洋の学問」（この場合、海軍近代化）を試しに使用する動機を与えたのである。

このように、儒教的な制度は、現代的な意味とともに守られるべきであった。その基本原則は本質的に保守的であり、儒教的な制度とそれらを守るために創出された近代的な海軍手段との間の矛盾を含んでいた。偶然的で人間的な要素がどれほど海軍近代化の物語を混乱させたとしても、この研究に大きく関わるのは、この矛盾である。同治中興は短命であったにせよ、王朝衰退の特殊な時期において、儒教的な制度を強化しようとする意識的な試みが企てられた結果、それらの制度が、自信を高めた王朝の壮年期より丈夫になった——あるいは、少なくともより柔軟になった——ことは、本当に真実であろう。

ところで中国は、一連の挑戦に速やかに対応するに足る海軍防衛力を近代化することに失敗した。次に、その制度的・思想的要因について考えよう。王朝の地方組織は、制度的な配置として分類されるかも知れない。中央政府と諸省との間の関係が、太平天国の乱以後、李鴻章のような人物の出現によって、どれほど緊張したとしても、中国の軍事力に関しては、確立された各省ごとの区分は残存していた。もし李鴻章が自分の艦船を清仏戦争に参戦させなかったとすれば、南方の官僚たちは、その艦船の大部分を日本との戦争に参戦させなかった。紙の上ですら、ナショナル艦隊は存在しなかった。間違いなく、艦隊を指揮するか、あるいは艦船を操縦する人々の心の中には、何一つ存在しなかった。忠誠心は、各省か個人に向けられたものであった。水師は、これまで統一されたことはなかった。おそらく航行速度の遅さが、そうした伝統的な軍隊における責任の分配に寄与した。航行速度の遅さは、近代的な艦隊にとって問題ではなかった。にもかかわらず、近代的な艦隊は、各省により組織されるか、あるいは——これはさほど有効でなかったが——李鴻章か、あるいは張之洞のような人物の個人的影響力の様式に従って組織された。

「儒教的な政体」と呼称されるもの下にある王朝政治体制は、近代化活動に伴う財政問題の中にも反映された。中国は、非常に貧しいが故に近代海軍を持つ余裕がなかったのではない。しかし、予算はなく、歳入は分割された。すなわち、中央政府と諸省との間の〔垂直的な〕拮抗、そして各省内の各部門間のみならず、省と省の間の〔水平的な〕拮抗を助長するような形で割り当てられることで、歳入は分割された。王朝衰退期において、習慣的な臨時収入が拮がり、公金横領が蔓延した。しかし、海軍予算を確立させ、北京で執行するためには、王朝組織を深甚に再構成する必要があったであろう。そしてそれは、最盛期の王朝でも試みられなかったであろう。

こうした組織上の障壁を越えて、海軍の近代化を妨げた、あるイデオロギー的な要因が存在した。ナショナリズムは、西洋人の創案である。19世紀の中国人は、——19世紀後半ですら——「国家 (state)」あるいは「民族国家 (nation)」と一体化する感覚をほとんど知らなかった。中国

の戦争は、地域的な問題であり、一般的な関心事ではなかった。1895年に、海関の官吏は、「日本との戦争は、直隸省に軽度の影響を及ぼしただけに過ぎない。そして、見る限りでは、天津の人々は、それを自分たちとは何の関係もない事柄であると見なしている。」と陳べている。¹⁰⁾ 直隸湾や威海衛で激戦に従軍した兵士たちは、社会から孤立していたのである。

より一般的な見方をすれば、改革者が常に孤独なのは事実かも知れない。しかし彼らは、この文脈の中では、いっそう孤独であった。1869年、改革者に刺激を与えた太平天国の乱の直後に、ロバート・ハートは「諸省にいる約40名ほどの官僚と、北京にいる約10名ほどの官僚は、外国人が一般に進歩という術語で話すときに、それが何を意味するのかを徹かに理解している。しかし、これら40名のうち、¹¹⁾ 図太く進歩の道に入る準備をしている者は、一人もいない。」と陳べている。

中国官僚には信念が足りなかったのではなく、彼らの信念は、儒教的な価値に満たされていたのである。彼らにとって、主要な制度は、公務員試験制度であった。この制度は、有能な中国人が個人的に昇進するための主要な手段に留まらなかった。海軍の近代化に必要な軍人と技術的な知識を犠牲にして、非技術的で文学的で芸術的な仕事と共に、学者として上昇させる多くの価値や選利物から成る防波堤であった。人が中国の兵器施設を運営し、そこに居続けるのを見るのは難しい。海軍官員を訓練し、新しく且つ賛美されない専門職にとどまるよう説得することは、いずれにせよ困難であった。脱落者が、高い比率で発生した。本研究の付録D〔訳註：本稿では割愛する〕は、物語の中ではただの学生として現れる、多くの福州船政学堂の出身者の名前である。そのリストに添付された海軍の経歴の下書きは、さほど多くは存在しない。海軍の経歴を作成する際の証拠不足は、一部分は、記録が保存される方法を反映したものに過ぎないのかも知れない。また、全ての海軍官員が高名なわけではなく、勲章を授けられたわけではなく、交戦中に死亡したわけではなかった。しかし、李鴻章による1888年の北洋海軍章程がある。章程は、彼の幹部候補生を励まして公務に帰属意識を持つことを期待している。そして、李の学生に高率の自然減が生じていることについては、李自身の声明がある。李の声明は、大方の者に対し、我々が検討した中国においては、陸軍あるいは海軍の経歴がさほど尊重されないという議論を屈服させるよう激励している。

蒸気船の潜在能力に適した海軍戦略を考案するのに失敗したことは、近代化過程に対するもう一つの抵抗を示している。確かに、なかには印象に残る進歩がある。黄海海戦は、大海で戦った。しかし、朝鮮と日本の間にある対馬海峡で戦ったわけではなかった。そして艦隊は、武力衝突が起こる以前に、戦略施設を厳しく制限されてきた。その後、何の戦略もなかった。艦船は、防備の固められた港に退却した。艦船は、固定された砦として使用された。中国の貧弱な戦略思考は、沿海を区分したことの副作用かも知れない。諸艦隊は、連合「ナショナル」艦隊に相応しい任務を引き受けはしない。資金が十分に調達できなかったことも、この貧弱な戦略をもたらしたと言うことも、適切であろう。しかし、逆の言い方をしても、少なくとも同じくらい正しいであろう。ところで、戦略を財政か、あるいは組織に関連付けることは、我々を制度の問題に立ち戻らせるのである。

伝統的な中国儒教制度の心臓部には、君主が立っていた。皇帝は、儒教思想の人格的・道徳的選択の典型であった。皇帝の判断に異議を唱えることはできなかった。失敗であるかどうかを最終的に判断する皇帝の役割は（失敗自体が、道徳問題と見られた）、取り調べや裁決に関する仲介装

置によっては、決して奪われ得なかった。海軍軍法会議が外国人の技術的な意見を取り入れたなら、それによって、天子が有した責任問題における想像上の全知は弱められたであろう。ここには、徹底して専門的な近代海軍力を創出することに対する、もう一つの制度的抑止力が存在した。そしてそれは、自信を持って自分の思い通りに判決を下したのである。

アヘン戦争から1860年代に海軍改革が始まるまでに、20年の間隙がある。中国側の反応の複雑さは、この間隙を指摘することで強調されてきた。近代化が始まった後ですら、あからさまな海軍の挑戦に対するおそらく唯一の明快な反応は、——すなわち、西洋人が原因と結果を実際に見て評価できる唯一の状況は——1885年における海軍衙門の創設であったが、それは清仏戦争後の出来事である。以上のことを想起するのは、興味深い。しかし、その年に、張之洞が永続的に広東への立ち入り禁止を施行しようとしたことも見たのである。ここには、全く正反対の反応がある。

もちろん中国が海軍を十分に近代化することに失敗したことは、より重大な工業化の失敗の一部分に過ぎない。中国の兵器製造工場は、社会的に孤立していただけではなく、経済的にも孤立していた。ここでも基礎的な説明は、伝統中国の儒教的価値及び制度を引き合いに出さなければならないのである。

要するに、19世紀中国における海軍改革は、少数の中国官僚によって着手された。彼らは各自、その問題に関し彼ら自身の評価を持っていたし、個々の海軍問題に対して、末梢的か、あるいは敵対的ですからある他の関心事に甚だしく心を奪われていた。中国海軍の近代化に向けた奮闘には、莫大なエネルギーと才能が投資された。それにもかかわらず、彼らの奮闘を無力にする矛盾の中に巻き込まれたのである。

註

- 1) 張之洞のラングへの関心については、『清季外交史料』巻106, 13頁, 1895年2月16日付; 巻116, 39頁, 1895年8月18日付, 参照。1896年2月に総理衙門がラングに宛てた招待状については, Stanley Wright, *Hart and Chinese Customs*, Belfast, 1950, p. 482, 参照。
- 2) W. F. Tyler, *Pulling Strings in China*, London, 1929, p. 104.
- 3) フォン・ハンネケンについては、『清季外交史料』巻100, 7頁, 1894年11月16日付, 参照。おそらくはブラジルとチリから艦船を購入する件について, 詳しくは、『清季外交史料』巻104, 19頁; 巻105, 27~29頁; 巻106, 2頁, 1895年2月3日, 11日, 12日, 参照。
- 4) Charles Beresford, *The Break-Up of China*, New York, 1899, Chap. 21, は, 彼の戦後の海軍視察について論じる。艦隊は, 人員が不足していた(乗組員たちは, よく訓練されていたように思われるとはいえ)。ベレスフォードは, その艦隊を丸ごと警備隊として使用し, 納入されない艦船は売り払うよう忠告した(このように, 2隻の4,800トン級アームストロング製巡洋艦は, 建造され, 費用が支払われたのであるが, 中国で人材と設備が不足していたために納入されなかった)。彼は, 福州船政局を非常に浪費的であるとして退けた。ドックは, 3,000トン級の艦船には安全でなかった。彼は, 「幾百」もの役に立たない軍用ジャンク船を見た。
- 5) Boulger, *The Life of Sir Halliday Macartney*, New York and London, 1908, p. 452.
- 6) “Professional Notes,” *United States Naval Institute Proceedings*, 40.4: 1128 (July-August 1914) に引用された, *United Service Gazette* (Great Britain) の記事。
- 7) 『清史稿』「兵志」7, 7~8頁。
- 8) John K. Fairbank, Alexander Eckstein and L. S. Yang, “Economic Change in Early Modern

China: An Analytic Framework," *Economic Development and Cultural Change*, 9.1: 1-26 (October 1960), p. 24. 私が論評するに当たって依拠した所論は、次の通り。「我々の知識の現状では、この時期に中国経済が全体として拡大しているのか、あるいは緊縮しているのかを決定することはできない。」

- 9) Clyde, pp. 177-180に引く、ヤングからフリーリングハウゼンへ、1884年1月31日付。
- 10) *Imperial Maritime Customs, : Returns of Trade and Trade Reports*, Statistical Series 3 and 4, 1895, PartII, *Tientsin*, p. 1.
- 11) 問題に対する答えは、その米国外交官が最初にやって来たときに、ロス・ブラウン (J. Ross Browne) によって、提出された。Clyde, *United States Policy Toward China*, Chapel Hill, N. C., 1940, pp. 97-98, に引用されている。